

いま、バプテストを生きる

—バプテストの教会形成の課題を共に考える—

発行に際して

2009年度から3年間にわたり『バプテスト』誌に連載してきたコラムをこのたび1冊の本にまとめました。

「バプテスト400年」(2009年度)は、バプテスト教会がその誕生時からこだわり大切にしてきた教会形成の諸課題をコンパクトにまとめたものです。

続く「今、バプテストの教会を建てる」(2010年度)では、前年度に取り上げた諸課題を実際の教会形成の中で展開しようとしたときにどのようなことがポイントになるだろうかという問題意識で、3人の若手の牧師たちに執筆していただきました。

3年目の「バプテストの信徒を生きる」(2011年度)では、「信徒の教会を形づくる」大切さを宣教研究所の濱野道雄所長から課題提示していただいたうえで、信徒としてバプテストの教会形成に参加する喜びや課題について、4人の信徒たちに執筆していただきました。

これらの原稿は、最初に編集会議で全体構想を練り、各ページの執筆意図を定めただけで執筆されたテキストとは趣が異なります。バプテストの教会形成を真剣に考え話し合いながら生まれた、牧師や信徒たちの「発題」として読んでいただきたいと思うのです。特に2年目と3年目のシリーズは、毎回原稿を持ち寄っては執筆メンバーで喧(けん)々(けん)譁(がく)々(がく)話し合い、時には全面的な書き直しをし、試行錯誤の中で生み出されていった原稿です。執筆者たちはその編集会議を「チーム・バプテスト」と呼び、そのような自由で真剣な話し合いの交わりにバプテスト教会の豊かな可能性と楽しさを感じながら、一回一回の原稿を仕上げていきました。

ですから、この本を手にとってくださった皆さんも、ぜひ各回の原稿をひとつの「発題」として受け止め、それぞれの教会で「今、バプテストを生きる」ということ、「バプテストの教会を形づくっていく」課題への取り組みを豊かにふくらませ、深めていっていただきたいと願います。

今回の合本に際しては、それぞれ『バプテスト』誌に掲載した原稿を基本にしつつ、多少手を入れ直しました。特に各テーマの最後に「分かち合いのポイント」を加筆し、各教会

での学びに活用いただきやすいように工夫しました。各教会での「バプテストの教会形成」についての研修会や、「牧師招聘」に際しての研修会などに、宣教部や宣教研究所発行のテキストと共にご活用ください。

『いま、バプテストを生きる』（略して『いまバプ』）が、諸教会における教会形成の学びの一助になるならば大きな喜びです。

主にありて。

2012年10月1日日本バプテスト連盟常務理事 加藤 誠

目 次

I バプテスト400年

1 不敬な輩(やから)たち 10

2 会衆の自治 12

3 自覚的信仰告白 14

4 すべての弟子に求められていること

—バプテストの信徒— 16

5 バプテストの牧師 18

6 バプテストの教育 20

7 バプテストの礼拝 22

8 バプテストの礼典 24

9 世界宣教 26

10 自立と協力 28

11 信教の自由 30

12 多様な賜物 32

II 今、バプテストの教会を建てる

13 バプテストの旅へ

—『正解』のない難しさと楽しさ— 36

14 民主的教会運営

—神の国の食卓の分かち合い— 38

15 メンバーシップと献身 40

16 執事・役員 —バプテストの信徒— 42

17 バプテストと平和

—主告白に生きる群れ— 44

18 牧師 —神に召された同労者— 46

19 教育・訓練

—主に聞くと、育まれるとき— 48

20 礼拝・説教 —共に建てあげる— 50

21 国外伝道 —国境なき神の国— 52

22 協力伝道 —共に建てあげる— 54

23 信仰の課題としての「信教の自由」 56

24 献金 ―ささげる生活― 58

Ⅲ バプテストの信徒を生きる

25 明日を開く鍵 ―信徒の教会― 62

26 『たまたまバプテスト』からの出発 64

27 バプテストの信徒でよかった！ 66

28 お客よりも家族へ 68

29 バプテストの信徒でよかった！ 70

30 信徒と牧師 ―私たちも献身者― 72

31 信徒と牧師

―冷静な視点と暖かい目線で― 74

32 ピンチはチャンス ―牧師招聘― 76

33 信徒と牧師 ―お手伝いの方々？― 78

34 仕事と教会 80

35 朝バプテスマ ―家庭と教会― 82

36 主日は週日を結ぶ線 84

I バプテスト400年

「バプテスト400年」

第1回

1609年にアムステルダムでジョン・スマイスが初めてバプテスト教会を組織して2009年で400年。この機会に私たちバプテスト教会の自己理解に大切なテーマを取り上げ、その歴史を振り返りつつ、現在の教会形成の課題を考えてみたいと願っています。

不敬な輩(やから)たち

ジョン・スマイスは英国のピューリタン「分離派」の牧師でした。ピューリタンは、当時の英国国教会の中に残っていたカトリック的遺風を、聖書に基づいて清めようとした人たちです。ピューリタンの中には、国教会の中にとどまって改革しようとした「非分離派」と、国教会とは完全に決別すべきと考えた「分離派」がありました。

当時の英国は、教会と国家が一体化し、人は誕生すると同時に幼児洗礼を受けて、住所地の教会に登録されるのが当たり前でしたから、その国教会を離脱して自覚的信仰者だけが集まり礼拝することは、国全体の社会秩序を乱す〈不敬な輩(やから)〉として厳しい迫害が加えられ、「分離派」の多くが国外亡命を余儀なくされたのです。

聖書を自分で読む人々

なぜ、彼らはそれほどの危険を冒して国教会から離脱したのでしょうか。その背景には、英語訳聖書の普及があります。当時はラテン語聖書のみが聖典とされ、英訳を志した者は火あぶりの刑に処されたほどであり、その解釈はラテン語を学んだ教職者たちに独占されていました。しかし産業革命を経て市民としての意識が芽生え始め、英語訳聖書が容認されるようになると、一般市民が自国語で自由に聖書を読めるようになります。彼らは、それまで絶対視されていた教職者たちの語る「伝統的な教理」に素朴な疑問をぶつけ、新約聖書に描かれた「初代教会の姿」にならって真のキリストの教会を創り上げようと結集しました。

つまりバプテストは、市民一人ひとりが自分で聖書を読み、聖書の真理を自らの信仰と生活の中に実践していくことを、真剣に追求する中に誕生した教会なのです。

信仰者のバプテスマ

「分離派」は国教会からは離脱しても幼児洗礼を保持していましたが、ジョン・スマイスは聖書研究の結果、幼児洗礼を支持する根拠はどこにも見出されないと結論づけ、イエス・キリストへの信仰告白を伴うバプテスマを主張して、まず自らにバプテスマ(※)を施し、次に仲間たちにもバプテスマを施して、初めてのバプテスト教会が誕生したのでした。

聖書の対話に開かれて

バプテストは、「教会の伝統」に縛られたり、ルターやカルヴァンのような偉大な神学者を祖と仰いだり、教職者に聖書解釈を独占させるのではなく、教会を構成する一人ひとりが自分で聖書を読み、キリストのからだとしての教会のあり方を誠実に追求していく交わりの中に、日々建てられていきます。それゆえ、例えば、逐語霊感的読み方を絶対視し、他の解釈を排除するような閉鎖的なあり方は、バプテストとしての命を自ら否定することになるのです。

不敬な輩(やから)たち

加藤 誠（第1回～第12回）

不敬な輩たち

a 〈不敬な輩〉と非難されても、バプテストが大切にしようとしたことは何でしょうか？

b バプテスト教会が建てられていくときに大切なことは何でしょうか？自由に語り合ってみましょう。

※このときのバプテスマは「灌水礼」と呼ばれる、水を頭からかぶる形式でした。

「バプテスト400年」

第2回

たとえ二、三人でも

最初期のバプテストは教会をどのように考えていたのでしょうか。亡命地オランダを離れ、死を覚悟して祖国の英国に戻る直前、トマス・ヘルウィスたちは次のように信仰告白しました。

「会員が二、三人であるとしても、各個教会にはキリストが与えられており、救いの手がすべて備わっている。各個教会はキリストのからだであり、完全な教会である。たとえ教会に按手を受けた牧師がいないか、獄中にあったとしても、彼らは祈り、預言し、パンを裂き、すべての礼典を執行して良いし、そうすべきだ」(1※)。

当時の英国国教会は、村々に建てられた英国中の教会が合わさって「一つのキリストのからだ、一つの教会」と理解していましたし、それぞれの教会は神学校を卒業し正式に叙階を受けた牧師を迎えて、その指導に従うことが「常識」でした。

正しい教職者による正しい指導のもとで、はじめて教会が成立するのか。いや違う。キリストを信じる者たちが二人または三人集められたところに教会は成立する。その教会は自分たちで礼典も執行できるし、牧師を選任する権威も所有しているのだというバプテストの教会観は、それまでの「常識」を根底からひっくり返すラディカルなものでした。

互いによく知り合い

バプテストは教会を「コングリゲーション」という用語で表現しました。これは「コン＝共に」、「グレギス＝群れ」というラテン語に由来し、聖書ではイスラエル共同体に適用されています(出 12・3)。国教会を離脱した人々は、「生まれながらのイスラエル」(国教会とその教会員)と異なって、罪を告白し、信仰を言い表した「新生したイスラエル」という自覚がありました。

「教会員は互いによく知り合い、魂とからだに対する愛の義務をすべて果すべきである。教会は互いに知り合っていないような、単なる群衆から成るものであってはならない」(2※)。

彼らは教会の牧会を教職者任せにはしませんでした。一人ひとりがキリストのからだの枝として、主にあって結びつき、補い支え合う関係を祈り求めたのです。

自らの弱さを自覚して

バプテストは、各個教会の靈的な自律と自治を主張し、各個教会の上に立ついかなる上部組織も認めませんでした、「単立」主義は採りませんでした。彼らは、各個教会を支配し管理しようとする為政者と国教会の主教たちに抵抗したのであって、各個教会の限界や弱さを自覚し、連帯の必要性を知っていました。ですからごく早い段階から彼らは互いに連携し、励まし合う交わり（連合・アソシエーション）を形成しています。

例えば、バプテストとしての信仰告白を一緒に作成する、牧師が投獄されたりして弱っている群れを支援する、バプテスト教会のない地域に開拓伝道するなど、各個教会だけでは担いきれない課題を、互いに切磋琢磨し、励まし合いながら共に担い、キリストの宣教命令に応えようと考えたのでした。

さて今日、私たちの教会には靈的な自律と会衆の自治の意識が健全に育っているでしょうか。

会衆の自治

※1…「アムステルダムに居留するイギリス人の信仰宣言」（1611）11項

会衆の自治

a 会衆の自治による教会を目指したバプテストは、教会員一人ひとりが「キリストの体」づくりに

参画するうれしい責任を自覚していました。そこにはどのような責任があるのでしょうか？

b 「連合」の交わりを大切にしたバプテストの知恵は、今の私たちの間でどのように生かされているのでしょうか？

※2…同 16項

「バプテスト400年」

第3回

カンパニー（company）としての教会

教会を「カンパニー (company)」と表現したところに、初期バプテストがこだわった教会の姿が示されています。カンパニーとは、「ある共通の目的のために組織された団体」ですが、古仏語では「交わり」を意味し、その語源はラテン語で「パン (panis)」を共有することにさかのぼります。

1611年、トマス・ヘルウィスたちは「キリストの教会は…信仰と罪の告白に基づいたバプテスマによって、主に対し、お互いに対して結び合わされた信仰者の集い (a company of faithful people) である」と告白し、幼児（嬰兒）洗礼を否定しました（※）。

人が誕生と同時に幼児（嬰兒）洗礼を受けて、自動的にその地域の教会に組み込まれていく。そのような制度的な教会（church）とは異なる、信仰を告白した者たちの主体的な集まりとしての教会を、彼らは「カンパニー (company)」という言葉で表現しようとしたのです（後に company が一般に「会社」を意味するようになるに伴ってその表現は消えていきますが）。

つまり、国家権力の統制のもとにある信仰ではなく、個人の主体性と自由に基づく信仰を主張したのがバプテストであり、本人の自覚を差しおいて国や家が信仰を決めていく仕組みに対して、彼らは命がけで抵抗したのです。

バプテスマが大切？

一方、彼らが現実には教会を形づくっていかうとしたときにたちまち直面したのは、教会員の子どもたちをどう扱うかという問題でした。

幼児（嬰兒）洗礼を授ける教会は、嬰兒の原罪を赦すために必要な恵みの伝達手段としての sacrament (秘跡)、そして神の民の一員として恵みの契約に加えられるしるしとして嬰兒に洗礼を施します。

これに対し信仰者のバプテスマに立つバプテスト教会は、嬰兒の原罪をどう考え、神の民をどう理解するのでしょうか。

ある人々は「バプテスマを受けていないと神の国に入れない」と考えますが、それはバプテスマを救いの保証と考えることになり、sacrament (秘跡) 的なバプテスマ理解に立っていることになります。

キリストの弟子となること

バプテストは自覚的信仰告白を大切にしますが、バプテストマそのものには恵みの効力を認めません。人間の告白に先行して、イエス・キリストの十字架において神のあがないの恵みは決定的に示されたゆえに、その恵みに応えてキリストの弟子となっていくことに重点を置きます。

ですから嬰兒の原罪を強調することもしません。すべての子どもたちのうえに、神の創造とあがないの恵みがすでにおよんでいるのですから、その子どもたちが一人ひとり神の前に自分の責任で立ち、決断できる時が来ることを祈って待つのです。

大切なことは、子どもたちが自分でキリストを受け入れることを決定できることであり、キリストの委託に応えうる生き方を始めて行くことです。バプテストが教会学校に力を入れて、信徒が互いに学び、成長し続けていく場を大切にしてきた所以(ゆえん)がここにありま

※…「アムステルダムに居留するイギリス人の信仰宣言」(1611) 10 項

自覚的信仰告白

a バプテストが「カンパニー (company) という表現で大切にしようとしたことは何でしょうか？

b 幼児 (嬰兒) 洗礼を否定したということは、自分の子どもにも「信仰継承」ではなく、「伝道」していく

ことを選んだということです。皆さんは子どもたちの信仰をどのように考えていますか？

「バプテスト 400 年」

第 4 回

祈りと断食をもって

バプテスト教会は、その最初期、当時の英国国教会の礼拝とは別に秘かに開かれた（公になると弾圧されたので）聖書研究の交わりが核となり、はじまりました。彼らは、聖書に描かれた真のキリストの教会を追求する志をもって、国教会からの離脱を決意します。彼らは断食と祈りをし、互いに手を取り合って輪を作り、悔い改めと共に信仰を言い表し、キリストに従って歩むことを互いに約束して、教会を組織したのです。

宣教する弟子として

17世紀の半ばに、ロンドンのバプテスト教会が共同であらわした信仰告白では、「浸礼」の聖書的意味と同時に「浸礼」を受けてキリストの弟子となる者の責務が告白されています。

「この礼典（バプテスマ）を受けるように、キリストによって導かれている者に対して、聖書は彼らが宣教する弟子となることを要求している。これは特別な教会と役員、あるいは特別な人に要求されているのではなく、キリストの委託は弟子たる者すべてに与えられているものにほかならない」（1※）。

「教会の会員は、（告白と歩みにおいて）キリストの召しに対する従順を見える形であらわし、証明する」（2※）。

宣教の働きを聖職者や一部の人限定して任せてしまうのではなく、教会を形成する一人ひとりが宣教する弟子としての召しを受け、その召しに対する従順を見える形であらわしていく責務を自覚していたのが、バプテストの教会の信徒だったのです。

教会員への「按手」

それゆえ、初期のバプテストは受浸して教会に入会した教会員に「按手」を施しています。生まれたての新会員も、キリストの弟子としてみ言葉を宣教し、牧会を担う責務があること、その責務を聖霊の導きを受けてよく担うことができるようにと、教会は祈りを合わせたのです。

また、最初期の礼拝ではひとつの礼拝で複数の説教者を立てて、会衆が自由にその聖書箇所を巡ってディスカッションをしていた様子も報告されています。

「お任せ」ではなく、共に重荷を担う

その後、次第に礼拝では一人の説教者が立てられることが普通となり、「按手」は牧師だけに施されることが多くなる中で、「宣教も牧会も牧師にお任せする」という誤解が生まれていないでしょうか。牧師が就任したときには「先生、どうぞ自由に思い切ってやってください」と言い、遠目で牧師の働きをながめ、何か問題が起こると牧師の責任を追及し始める…という教会の実態がありはしないでしょうか。

牧師への「按手」には、教会がその人を群れの霊的指導者として立てるという意味があると同時に、そこで手をおく者（教会員）は、「お任せ」の意味で手をおくのではなく、そもそも自分にも託されている宣教と牧会の使命を自覚しつつ、「共に重荷を担う祈りと決意」をもって、手をおいているはずなのです。

毎週の礼拝が、ただ「牧師の説教を聞くだけ」で、礼拝堂を出たらその内容も忘れてしまうような礼拝ではなく、「共に真剣にみ言葉に聴き、み言葉を生きていく祈りと決意を分かち合い、聖霊の導きを求めて派遣されていく礼拝」として豊かに捧げていきたいものです。

すべての弟子に求められていること―バプテストの信徒―

※1…「第一ロンドン信仰告白」（1644 年）41 項

※2…「第二ロンドン信仰告白」（1677 年）26 項 6

すべての弟子に求められていること

―バプテストの信徒―

a バプテストの信徒に求められている責務は何でしょうか？ それぞれが言葉にしてみましょう。

b 牧師への「按手」に際して、何を大切にしていますか？

「バプテスト 400 年」

第 5 回

迫害下に集い続けた人々

17 世紀半ばの市民革命によって王政が倒れるまで、信教の自由は厳しく制限されていたため、英国のバプテストは過酷な迫害を受けます。彼らは人目を忍んで朝早く森の中で礼拝を守ったり、夜にはドアの前に見張りを立たせて用心深く三々五々集まって集会をもちました。それでも集会が発覚すると、暴徒に石を投げつけられたり、秘密集会のかどで警察に逮捕されたといえます。

その迫害下の教会に集まり、新約聖書に記された真のキリスト教会を建てるビジョンに参加したのは、当時の社会では低く評価されていた労働者たちであり、その群れの監督（牧師）に立てられたのは、ごく少数の元国教会牧師を除くと、「石鹸製造師」「仕立師」「ボタン製造師」「靴下製造師」など、職人として生活の糧を得ながら牧師職を担う者たちでした。

「人間の知恵」によらず

当時の国教会の牧師は、ケンブリッジ大学などで神学を修め、国教会の按手による聖職叙任を受けて、国民の税金（教会税）で高い聖職禄を保証されたエリートたちでしたが、バプテストは教会税で扶養される牧師を断固拒否し、自分たちの教会の牧師は自分たちで選任して、自発的な献金によって支える道を選びます。バプテストの牧師たちは、国教会の人々から、神学的知識に乏しい「無学な者が聖書をねじ曲げて解釈している」と非難を受け、「職人説教師」「桶説教師」と揶(や)揄(ゆ)されます。しかし、み言葉を取り次ぐ者に求められているのは、「人間の知恵ではなくみ霊に教えられることだ」と反論し、厳しい迫害下にあっても粘り強く伝道を続けたのでした。

教会自身の深い祈りと
献身において

「教会は…キリストのみ言に従い、より良き存在のために牧師、教師、長老、執事を選ぶ。彼らはキリストの教会を建て、養い、治め、仕えるために選ばれるのであり、他のいかなる者も彼らの上に権力を振るうことは出来ない」（1※）。

「奉仕職を担ったキリストの教会は、会員の中から、キリストによって適切な賜物と資格を与えられた者を選び、断食、祈り、按手によって、彼らが召されたそれぞれの務めを行うように、承認し、任命する」（2※）。

これらの信仰告白から見えてくるのは、各個教会の上に立ついかなる権威も認めず、教会員たちが自らの深い献身と祈りと決断において牧師を立てていく自立した教会の姿です。そして、バプテストの牧師たちは、上部機関のお墨付きを受けた権威的指導者として教会員の上に立つのではなく、聖霊の導きを求めつつ教会の祈りを共有し、キリストを土台とした信頼関係において初めて成立する、み言葉を取り次ぐ職務に、喜びと誇りを持って取り組んでいったのです。

骨の折れるプロセスを通して

バプテストは、教会員一人ひとりの意見を尊重し、多様なあり方を喜ぶ教会です。しかしそれだけに、教会全体でひとつの方向に一致していくことが、時に難しく、リーダーにとってはとても骨が折れる教会です。牧師の「鶴の一声」でことを決められたら、どんなに楽でしょうか。しかし、骨の折れるプロセスの中に聖霊の働きを祈り、教会員も牧師も主のみ心になることを深く求めていく。その信仰の成熟においてバプテストの教会が建てられていくのです。

バプテストの牧師

バプテストの牧師

a バプテストの牧師に求められることは何でしょうか？

b 同時に牧師を立てる教会に求められることは何でしょうか？

※1…「第一ロンドン信仰告白」(1644年)36項

※2…「サマーセット信仰告白」(1656年)31項

「バプテスト 400 年」

第 6 回

聖書による信徒訓練

初期のバプテストの群れは、自分たちの信仰共同体が、キリストの福音を証する交わりとなることを祈り、聖書による信徒訓練を大切にしました。

次の文章は、ある教会の「教会契約」の一部です（現在の「教会の約束」の原型にあたるもの）。

「主に対する畏れのもとに歩む我らは、聖霊の導きにより…わが身を主に捧げることを告白する。…我らは神を敬いつつ謙虚に、兄弟愛をもって交わりに奉仕する。…我慢強く相互に警告し合い、叱責し合い、忠告し合う。…お互いの弱さ、失敗、欠点を限りない優しさをもって担う。…互いに平和の絆のもとに魂の一致に努める。…我らは神から与えられた力に従って、我らの牧師を献金で支える（communicate）ことを約束する」（※）。

ここには、教会員一人ひとりが「信仰共同体」に参加し、その牧会を担い合うことが信仰の成長に不可欠なこととして理解されており、特に牧師を「献金で支える（communicate）」の原意はラテン語の「他人と共に持ち合う」であり、そこには「労苦を共にする」という意味が込められていて、他のピューリタン各派には見られないバプテスト独自の視点を見出すことができます。

バプテストの教育～そのチャレンジ

監督や教職がいる教会の場合は、教派公認の〈教師〉が、教派の〈教理〉を教科書にして、信徒を〈正しく〉教える形で、教会の教育的機能が保たれています。この場合、教理の枠を外れる混乱の危険はほとんどありません。

一方、バプテストは、教派としての〈教理〉を持たず、聖霊の導きによる一人ひとりの主体的信仰（どのように聖書を読むのか）を尊重するので、そこに多様な聖書理解・信仰理解が生まれます。

ある教会では、そのような多様性を放置すると一致した教会形成ができないと考え、牧師の権威のもとに「こうあるべし」と教会員をひとつの理解にまとめようとします。ひとつの教理のもとに統制された教会形成を目指すなら、牧師が教師として立ち、信徒はその教えに従うシステムがふさわしいでしょう。

しかし、バプテストの教会を建てていくということは、多様でありつつ、ひとつのキリストの体を形成するという、非常に困難でダイナミックな教会形成にチャレンジすることで

あり、正解を知っている者が知らない者に教えるという図式ではなく、教える者も学ぶ者も対話を通して共に聖書から聴いていく姿勢を大切にするということです。それは聖霊の働きのもとに、教会員も牧師も謙虚にされていくことなしには成立しません。

日ごとに、週ごとに新たにされて

お互いの主体的な信仰を尊重しつつ、自己を絶対化せず、常に異なる者との対話に開かれていること。その対話において自分の意見を通すのではなく、対話を通して各人が聖書の語りかけに心を開き、最終的に主イエスに聴従していく。そのような自己革新と自己訓練、そして信仰の成熟において、バプテスト教会は建てられていきます。

信仰は、一度の悔い改めで成立するものではありません。常に日ごとに、週ごとに新たにされていく、その過程が必要です。特に異教社会でありクリスチャンが絶対少数者である日本社会で信仰を持ち続けること、教会人であり続けることは困難な課題ですが、一人ひとりの生活の場でみ言葉が受肉していくために、励まし合い学び合う教会を共に形成していきたいと思います。

バプテストの教育

※…サザークのホーリスダウン教会の「教会契約」（1697年）

バプテストの教育

a 「教える立場」にある人が、「対話を通して自分も学び、変えられること」を喜んでいるでしょうか？

b バプテストの教育で大切なことは何でしょうか？

「バプテスト 400 年」

第 7 回

宗教改革期の礼拝

中世のローマ・カトリックのミサは、司祭がラテン語で司式をし、特別な訓練を受けた聖歌

隊が賛美を捧げ、信徒はその空間に身をおくことで自動的に罪の清めと恵みを受ける場でした。

16 世紀の宗教改革では、聖書に基づいた簡素で真実な礼拝の姿を求めて、カトリック的慣習や儀式が排除され、み言葉の説教が中心となり、自国語の聖書が朗読されて、信徒は祈祷と会衆賛美をもって礼拝に参加するようになりました。

英国国教会の礼拝（管理と統制）

英国国教会でも、国語による礼拝、礼拝様式の簡素化、礼拝式文からの非聖書的要素の排除が目指されましたが、教職者中心の礼拝は変わりなく、会衆は成文化された祈祷書に従って祈りを捧げ、説教のできない教職者は国教会が用意した説教集を朗読して説教しました。日常生活では共通祈祷書の使用が全国民に強要され、これに背く者は「国の秩序と平安を執拗に妨げる者」として罰金が課せられ、再犯は収監、三度目は全財産没収と終身刑という厳罰が課せられました（1※）。

ここに見えるのは、国家の権威と一体となって、人々が聖書をどう読み、どう祈るのかまでも徹底的に管理し統制しようとする教会の姿です。この共通祈祷書の使用は評判が悪く、ピューリタンたちがさまざまな抵抗を試みますが、祈祷の自由、説教の自由を真剣に追求する者は、国外亡命か、秘密集会を持つ他ありませんでした。

バプテストが追求したもの

1609 年にアムステルダムで誕生したバプテスト教会の礼拝は、「祈りと聖書朗読、聖書箇所の説明と会衆のディスカッション、複数名の説教者による説教、貧しい人たちへの献金の勧め、祈り」という、聖書に基づいた礼拝の本質を簡素に求めたものでした。興味深いことは聖書朗読が終わると、説教者は聖書を含むすべての本を脇に置いて説教をしている点です（2※）。

ここに特徴的に読み取れることは、①聖書のみ言葉を中心にした礼拝、②教職者主導ではない会衆の参与による礼拝、③聖霊の自由な働きの尊重、④福音に基づいた隣人性を伴う信仰共同体の追求です。つまり、主の招きを受けて集められた信徒一人ひとりが、聖霊の働きを祈りつつ、共に聖書に聴き、互いに聴き合う礼拝を通して、生きたキリストのからだを建てあげることをバプテストは追求したのです。

どのようなキリストのからだか
形作られているか？

「自由教会の礼拝がすべて建設的だったとは言えない。牧師が礼拝式を支配し続け、教職主義の回復が起こり、そのため会衆は聞く役割に服従させられている教会も生まれた」。「ピューリタンの教会では、極端な個人主義と主観的な偏重によって、共同体が一団となって礼拝する教会の概念が失われていった」(3※)。

バプテストは聖霊の自由な働きのもとにある礼拝を大切にしました。しかしそれは「自由であれば良い」ということではありません。最も大切なことは、その礼拝を通して、どのような “キリストのからだ” が形作られているのか、キリストの福音を生きる “共同体の証” がどのような形で表現されているかということなのです。

バプテストの礼拝

※1・2…「バプテストの礼拝の歴史：初期イギリス・バプテストから」

(金丸英子氏講演 2008 年 8 月宣教研究所)

バプテストの礼拝

a バプテストらしい礼拝を考える上で、大切にしたいこと、あるいは避けるべきことは何でしょうか？

b 「生きたキリストのからだを建てあげる礼拝」となるために、どのようなことが大切でしょうか？

※3…『キリスト者の礼拝』(F・M・セグラ、C・R・ブラッドリー著、鳥山美恵他訳)
50 頁以下。

「バプテスト 400 年」

第 8 回

「信仰のみ」の徹底

ローマ・カトリックは、神の恵みを人間に仲介する「秘跡」(sacrament 1※)を重視します。司祭によって授けられる嬰兒への洗礼。その洗礼によって、人はキリストの恵みへと入れられます。この場合、人間の側の信仰は問われません。それに対してプロテスタントは「救いに必要なものは信仰のみ」と理解しました。恵みを仲介する手段としての秘跡を否定し、「洗礼と聖餐」だけを「新約聖書のキリストに由来する」という理由で「聖礼典」(sacrament)として残しました。しかし「信仰のみ」と言いながら、プロテスタント主流派は嬰兒洗礼を保持したため、バプテストはそこに「信仰のみ」の不徹底を見ます。そして、礼典においても教会論においても「信仰のみ」を徹底しようとしませんでした。

「オーディナンス」として

多くのプロテスタントが「聖礼典」の表現に「 sacrament・sacrament」という用語をそのまま当てはめたのに対し、バプテストはカトリックの秘跡理解に明確な一線を引くため、「オーディナンス・ordinance」(キリストが命じ制定された)という表現を用います。「彼らは共に祈り、預言をし、パンを裂き、聖なる礼典(ordinance)を行うべきである」(2※)。日本語では sacrament も ordinance も「礼典」と訳され、その違いが伝わりませんが、「礼典は神の恵みの仲介手段ではない」との理解をバプテストは明確にしようとしたのです。

キリストご自身が「 sacrament」

もし私たちの信仰にとって、本当の意味での救いの手段、秘跡(sacrament)と呼ばれるべきものがあるのなら、それはイエス・キリストご自身であり、礼典はそのキリストの恵みを指し示す象徴(シンボル)です。キリストと共に死に、よみがえりの命に生かされる。その恵みをあらわす形として「浸礼」を大切にしますが、しかしバプテスマによって人は救われるわけではありません。例えば重篤の病人が信仰を告白したとき、「バプテスマを授けないと救われない」と考えるのか、「キリスト告白で十分」と考えるのか。「バプテスマ→救い」ではなく、「救い→バプテスマ」の順であることをいつも覚えておきたいと思います。

教会の告白、宣教として

主の晩餐で分かち合われるパンと杯は、十字架で裂かれ、血を流されたキリストを記念するシンボルです。主の晩餐は、それを食することで罪の赦しを得るのではなく、十字架のキリストの恵みを想起しつつ、新しい契約のもとに神の国の完成にむけて福音宣教の使命に生きる、キリストの体なる教会の告白です。またカトリックをはじめ、多くの教会が「聖礼典執行者」の資格（正式な叙階を受けた司祭、あるいは教団公認の教職者であるべきこと）を明示しているのに対し、バプテストは、礼典執行権は各個教会に委ねられており、個々の執行者資格を問うよりもむしろ、受領者の姿勢に関心を向けています。「この礼典を受けるように、キリストによって導かれている者に対して、聖書は彼らが宣教する弟子となることを要求している」（3※）。

恵みの想起から、神の国の完成に向けてキリストの恵みを告白し続けていく。バプテストの礼典は、「教会の宣教」として位置づけられていることを覚えていきたいと思います。

バプテストの礼典

※1…洗礼、堅信、聖体、告解、叙階、婚姻、塗油が七つの秘跡。

※2…「アムステルダムに居留するイギリス人の信仰宣言」（1611 年）11 項

バプテストの礼典

a バプテストが礼典で大切にしようとしたことを自分の言葉で表現してみましょう。

b 礼典を通して、「宣教する弟子」となることが求められている意味について語り合ってみましょう。

※3…「第一ロンドン信仰告白」（1644 年）41 項

「バプテスト 400 年」

第 9 回

カトリックの海外宣教

15 世紀におけるローマ・カトリックの海外宣教の進展は、ポルトガルとスペインの海外帝

国の拡大と表裏一体でした。パトロン(保護者)システムと呼ばれ、すべての伝道費用を国が賄(まかな)い、王が信仰の伝(でん)播(ぱ)と異邦人の改宗に責任を持ち、訓練された修道会士たちをアジアや南アメリカ大陸に派遣していきました (1※)。

一方、プロテスタントはカトリックに比べて教会の規模も小さく、カトリックとの戦争やプロテスタント教派間の内輪もめに力をそがれていて、世界伝道どころではありませんでした。また神学的にも、例えばカルヴァン主義では、人間の救いは神によって定められているという理解のもとに、人間が異教徒にわざわざ伝道しなくても、神が定められたときに信仰へと導かれるのだという理解が一般的でした。

「世界宣教の父」W・ケアリー

1786 年、英国中部のバプテスト派牧師会で 25 歳のウィリアム・ケアリーが「キリスト者は外国に福音を宣教する計画をたてる義務がある」と提案したとき、「若者よ、座りたまえ。神は異教徒を回心させたいときには、君や私の助けなど借りずにそうなさるのだよ」と議長がたしなめたといいます (2※)。

その 5 年後、「神に大いなることを期待せよ。神のために大いなることを企画せよ」というケアリーの説教が人々を動かし、「異教徒に福音を伝えるためのバプテスト協会」が設立されます。しかし財政的な裏づけは脆弱で、ケアリーがこの宣教団体の初代宣教師として自分自身をささげたとき、妻は 4 人の子どもを連れて夫と別居することを密かに決意したほどでした。

ケアリーのインド伝道

1793 年にインドに赴任したケアリー一家の生活は過酷を極めます。当時インドを支配していた東インド会社は、宣教師の福音宣教によって彼らの植民地支配が脅かされると考え、宣教師を敵視しました。ケアリーはインディゴ（インド藍）工場で働き、自給しながら伝道に努めますが、貧しさの中で家族は次々に病気にかかってしまいます。しかしケアリーは工場監督の仕事をしてながら、従業員のために集会を開き、いくつもの方言を学んでは、聖書を翻訳して村々を訪ねて福音を伝えていったのです。

「一方通行」から「双方向」へ

19 世紀は「世界伝道の偉大な世紀」と呼ばれ、プロテスタントの世界宣教もプロテスタント諸国の植民地拡大と並行して拡大していきました。

宣教師たちはインドの小児結婚、不可触階層制、中国のてん足、あへん常習癖、アフリカの一夫多妻制など、伝道地の社会悪を正し、学校や病院、孤児院、ハンセン病院を開設して、飢饉や洪水、伝染病と闘いました。しかし宣教師たちの働きは、伝道対象国の文化や宗教を「迷信」として取り除き、欧米キリスト教を進んだ文化として植え付ける姿勢があったことは否めません。第二次世界大戦後、世界各地の植民地独立と並行して、伝道地の教会も宣教師本国の支配から独立し始めると、そのような「一方通行」の宣教が問い直されるようになります。そして今では、宣教師は伝道地の教会と共に福音にあずかるパートナーとして、「双方向」の福音の働きに仕える使命が期待されるようになっています。

世界宣教

※1…『福音を分かち合う喜び』(松見俊・日本バプテスト婦人連合ブックレット)第 6 章、7 章参照。

※2…『近代バプテスト派研究』(高野進・ヨルダン社) 第三部参照。

世界宣教

a 今日、宣教師を国外に派遣する意味は何でしょうか？

b 「双方向」の福音の働きとして、どのような実りを感じていますか？

「バプテスト 400 年」

第 10 回

自治意識の高さと協力

バプテストは各個教会における自治意識が非常に高い教会でした。教会運営を監督や長老という専門家に任せてしまうのではなく、会衆一人ひとりが自らの祈りと献身をもって教会を担い、自分たちで牧師や執事を立てる責任性を深く自覚していたのです。それゆえ各個教会の決定権に介入する外部権力を認めませんでした。しかし同時に、バプテストは教

会が単独で建つことの危うさを知っていましたので、その最初期から互いに助言し協力し合うグループを形成しました。それが「アソシエーション」（日本語で「協会」「連合」などの意味）という集まりです。

他教派の場合、各個教会に対して何らかの支配権を持つ上部組織があるのに対し、バプテストの「アソシエーション」は上部組織ではなく、あくまでも相互協力の組織でした。

互いの平和、愛が増し加わるため

「諸教会は互いの平和のため、愛が増し加わるため、相互の薫(くん)陶(とう)のために交わりを持つ」。「教理上、あるいは教会政治上の困難、相違が起こった場合（例えば教会員が譴(けん)責(せき)処分を受けたとき）、交わりを持つ諸教会が、その不和の問題を共に考え、助言するために使者を派遣し、関係諸教会に報告することはキリストのみ心になうことである。しかし、集った使者たちは、教会に譴責を与えたり、何らかの決定を押しつけるような支配権は委ねられていない」（1※）。

この信仰告白を読むと、今の私たちが抱いている「連盟」や「地方連合」のイメージよりも、もう一歩深く各個教会の牧会上の課題に踏み込んで関わっている様子が見えます。しかし、それでも最終的な決定権はその教会が持っている。それがバプテストの教会理解でした。

悩みと課題を持ち寄って

「アソシエーション」では、ほぼ半年ごとに開催され議論が尽くされる「総会」に各教会から2〜3名の使者が集まり、その時々教会で問題になっていることを持ち寄って協議し、その結論は回状によって諸教会に報告されました。

例えば十分の一税（国への税金）の支払い・破門・役員の任命・牧師給・按手・賛美・断食・結婚・日常生活倫理などについて協議が行われ、牧師が投獄された教会への支援、バプテストの教会がない地域への開拓伝道などもテーマになっています。

それまでは牧師が自己研鑽を積むような研修会はあっても、このバプテストの「アソシエーション」のように教会の信徒を交えたかたちでお互いの悩みや苦しみを共有しようとい

う集まりはなかったようです。つまり、この世の生活の中でどう具体的に信仰を証していくのか、誰か偉い指導者がこうしなさいと指示を与えるのではなく、教会の代表者たちが「教会のことがら」として一緒に考え、答えを探していった。そこに、バプテストが創り出した「アソシエーション」の大きな意義があるのです（2※）。

「自分の教会の課題だけで精一杯」「他教会からの干渉は受けたくない」と、交わりの扉を閉ざしてしまうのではなく、「互いの平和、愛が増し加わるため、相互の薫陶のため」、悩みと課題を持ち寄り、共有する、開かれた交わりを積極的に創り出していったバプテストの先達たちの知恵に学びたいと思います。

自立と協力

※1…「第二ロンドン信仰告白」（1677 年）第 26 章—14、15 項参照

自立と協力

a アソシエーションが生き生きと機能するために、大切なことは何でしょうか？

b そのために自分たちの教会ができることは何でしょうか？

※2…『初期バプテストの「アソシエーション」について』

（大西晴樹）1999 年、西日本地区三連合同牧師研修会講演録より

「バプテスト 400 年」

第 11 回

ローマ帝国下のキリスト教

ローマ帝国公認後のキリスト教は、特権を与えられ、国家と一体化して国民を支配しました。教会は正統を守るために異端を抑圧し、中世の秩序の中に人々をつなぎとめる役割を担ったのです。

宗教改革の時代、中部以西のヨーロッパでは「領土の統治者が宗教を決める」原則（アウグスブルク宗教和議）が打ち立てられてローマ教皇の支配権は否定されましたが、国ごと

に見れば統治者と宗教とが表裏一体となって国民を支配する仕組みに変化はありませんでした。

「心を支配する道具」としての教会

英国でも、英国国王は同時に英国国教会における唯一の最高首長でもありました。その国王の名によって共通祈祷書の使用が全国民に強要され、背く者は「国の秩序と平安を妨げる者」として厳しく処罰されたのです（22 頁参照）。

国家は国民の心を支配する道具として教会を利用し、教会（指導者）は自らの権益を守るために国家を利用しました。教会が行う嬰兒洗礼は住民登録と同じ意味を持ち、住民の個人情報はずべて教会＝国家によって管理されたのです。しかし、新約聖書の真理を追究する一握りの人々が、そのように国家の制度に守られた教会を批判し始めます。「国や家の信仰」ではなく「個人の信仰」が、「伝統の継承」ではなく「一人ひとりの決断」としての信仰が意識されていきます。

「信教の自由」を求める最初の主張

トマス・ヘルウィスは殉教覚悟で亡命地のオランダから英国に戻ると、当時のジェームズ I 世に本を献呈し、「完全な信仰の自由と、良心の事柄には国家が介入すべきではないこと」を訴えます。その献呈の辞に彼は次のような言葉を添えました。「王よ、お聞き下さい。…王は死すべき人間であり、神ではないのだから、臣民の不滅の靈魂を支配する権限を持たない。…王よ、あなたはあざむく者にだまされて、神と貧しい臣民に対して罪を犯してはならない」と（1※）。

彼は統治者としての王に託された職務を認めつつも、神の前における人間の限界と罪を明確に言い抜きます。これは英国において信仰の自由を求めた最初の主張でした。彼が優れていたのは自分たちの自由だけでなく「異端者、トルコ人、ユダヤ人、その他誰であろうと、罰する権限は地上の権力者には属していない」と、宗教の自由そのものを訴えた点です。しかし、彼はこの訴えを胸に獄中で死ななければなりませんでした。

「澄んだ良心」を求めて

1644 年の第一ロンドン信仰告白は「行政上の権威としての国王や議会、そして法律の有効性を認め、税金などの法的義務も喜んで果す」「しかし、私たちの良心が従えない教会法について、その義務の履行を求めて不当な苦しみが加えられるべきではない」「たとえ迫害が加えられても、私たちは喜びをもってキリストへの服従の道を歩み、人よりも神に従うことを選び取る」と告白し、最後は「神のものは神へ、皇帝のものは皇帝へ返す…いつも澄んだ良心をもつよう努力すべきである」と結んでいます。(2※)

人間が「神のもの」と「人のもの」を混同するとき、大きな過ちを犯してきたことは歴史が証明していることです。何が「神のもの」で、どこまでが「人のもの」として委ねられているのか。神に「澄んだ良心」を求めながら、政治と宗教の距離感をきちんとわきまえていく。その努力が私たちには求められているのです。

信教の自由

信教の自由

● 今日の日本で、「信教の自由」を大切にする

バプテストとして、こだわるべき課題として

どのようなものがありますか？

※1…「不正の秘密についての短い宣言」(1611 年)

※2…「第一ロンドン信仰告白」(1644 年) 49－53 項

「バプテスト 400 年」

第 12 回

5 人の教会設立

英国で 1640 年に誕生したブロードミード教会の「教会契約」には、その設立に参加した 5 人の名前が記されています。「アトキンス、コール (肉屋)、ムーン (蹄鉄工)、ベーコン (牧師)、ハザード女史」。このたった 5 人の教会設立に中心的役割を担ったのはハザード女史です。彼女たちは夫や周囲の人々が迫害を懸念して「まだその時ではない」と引き止めて

も、「隠れて納屋で集会を守ることはできる」と言い、「主の力と助けを得て、国教会の誤った礼拝から離れ、その死に至るまで主を純粹に礼拝していく」という契約をもって教会を設立したのでした(1※)。

「奴隷や自由な身分の者もなく」

召使いを含めた家族全員が、自分たちの住む町内の国教会に自動的に所属することが当たり前の、「家」の秩序がそのまま社会の支配秩序に組み入れられていた時代に、妻が夫の制止を振り切り自らが信じる道を選び取っていくのは大変な冒険だったと想像されます。その他にも、デュッパの教会執事を務めた靴下織物商の妻チドレー女史、「離婚した女性説教師」と国教会から擲(や)擲(ゆ)されながらも活躍したアタウェー女史など、当時のバプテスト教会には「両性の靈的平等」の雰囲気が満ちていました (2※)。

「もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もない」(ガラテヤ 3・28) というパウロの言葉通り、「肉屋」も「蹄鉄工」も、職業を持たない「女性」も、キリストに従い、この世で主を礼拝し証を立てていくという志において、共にひとつの共同体に参加していく。そこに社会的差別が持ち込まれることなく、主にある同労者としてそれぞれの賜物が発揮されていく。

バプテストの人々が、新約聖書に描かれた真のキリスト教会の理想を胸に、希望に燃えて教会づくりに参加しながら、当時の社会全体のあり方を揺さぶる「小さなからし種」の役割を担った様子が目に浮かびます。

「戒めの遵守」…試行錯誤

一方でバプテストは、国教会のクリスチャンとは違う「見える聖徒」として、この世で証を立てていく意識が強くあり、聖書による禁欲的で厳格な「戒めの遵守」を重視しました。入会前には、その信仰と決意が一時的なものではないことの確認が長い期間にわたって慎重に行われ、入会者には自らの言葉で新生の体験を語ることが求められました。誰でも参加できるけれども、会員の志と行動については厳しい審査を行う…。迫害の中にあつてバプテストとしての純粹さを守ろうとするゆえに、教会から破門されていった人々も多くいました。私はそこにバプテストの試行錯誤を見ます。

「多様」における「一致」

パウロが I コリント 12 章で語っているように、教会を構成している「多様な一人ひとりの尊重」は、バプテストの教会形成における命でありエネルギーです。しかし、その多様な一人ひとりがキリストの福音を体現する「一つの体」を形作っていくために、どこで「一致」していくのか。牧師の強力なリーダーシップや戒めの遵守で「一致」をつくるのではなく、「多様な一人ひとり」が聖書を開きながら、「キリストを必要とし、他者なしに生きえない自分」を見出してゆく、祈りの深まりと成熟、試行錯誤のプロセス（途上）に教会の「一致」は与えられていくのです。

多様な賜物

※1…Mcbeth 『A Sourcebook for Baptist Heritage』 30－31 項

※2…大西晴樹 『イギリス革命のセクト運動』。

多様な賜物

● 「奴隷や自由な身分の者もない教会づくり」がどこまで実現できているでしょうか？

今、問われている課題について語り合ってみましょう。

II 今、バプテストの教会を建てる

「今、バプテストの教会を建てる」

第 13 回

バプテストの旅へ — 『正解』のない難しさと楽しさ—

「バプテスト 400 年」を受けて、現在の私たちの教会の課題やテーマについて考えます。私たちが今、バプテストの教会を建てていく中で、直面している課題やテーマは何でしょうか。迷いながら、問われながら、私たちに示されていることを、ご一緒に考えたいと思います。

「こだわり」と「受容」の葛藤

私がこれまでバプテストというものを特に感じたのは、教会組織に向けての教会の信仰告白作成の時でした。4年間かかりました。その間、教会の皆さんと何度も話し合い、密度の濃い分かち合いをしてきました。それは多くの恵みに与る時でした。しかし、互いに信仰を問われる時でもあったように思います。

よくバプテストが大切にしているのは、「一人ひとりの信仰の主体性」だと言われます。しかし、実際に信仰告白作成等を経験して思うのですが、一人ひとりが主体的な信仰を持ちつつ、互いの信仰の違いを受け入れるということは簡単なことではありません。色々な葛藤を通ることがあるのではないのでしょうか。自分が信じている事柄に主体的なこだわりをもてば、違うスタンスに立つ人を受け入れるために、ジレンマやもどかしさを感じることもあるでしょうし、事柄が重要であるほど、譲れない思いになり、ぶつかり合うことがあるかも知れません。たとえば、教会建築や牧師招聘のプロセスにおいても、そのような「こだわり」と「受容」の葛藤を通ることがあるのではないのでしょうか。

「主が求めているのは何か」

という選び取り

ただ、そのような葛藤の中で、私たちは信仰の一番大切な部分が問い直されたり、真摯な思いで主のみ前に立たされていくのかも知れません。自分たちの思いでは明快な答えが出せない中、揺さぶられながらも「主が求めているのは何か」という思いに立ち戻っていくのです。結果、それまで建てあげてきた信仰のあり方が問い直されたり、碎かれることがあります。そして、痛みを通りながら、新しい決断へ導かれることもあるでしょう。選び取った後も「本当にこれでいいのだろうか」というもどかしさや痛みや課題が残ることがあるかも知れません。しかし、私たちはその時自分たちにできる精一杯を選び取り、最後は主に委ね、赦しと導きを求めながら歩んでいくのです。

「聖書」というコンパス

私たちがバプテストとして、こだわりを大切にしつつ、新しい出会いを喜ぶ群れであろうとする限り、答えが出ない葛藤が続くのだと思います。いつも決まった答えに、どっかりと座りこむことができない私たちがいます。それは、まるでひとつの指針が見えない航海

を続けているかのようです。しかし、その中で、私たちは、信仰の原点である「聖書」というコンパスを手にしながらか、航海を続けるのです。航海を続けている者同士、揺れながら、共に聖書に聞いていきます。揺れる度に、聞き続けられないではいけないのです。まさに「正解」のない難しさと楽しさがあるのが、バプテストです。そのようなバプテストについて、ご一緒に考えていきましょう。バプテストの航海の旅へようこそ。

鈴木牧人

バプテストの旅へ

～『正解』のない難しさと楽しさ～

「今、バプテストの教会を建てる」

第 14 回

民主的教会運営 一神の国の食卓の分かち合い

「教会の生命にとって決定的なことは、教会の主であるかたのみこころを絶えずたずね求めてゆくことであり、バプテストは、このつとめには全会衆が従事する責任があると信じてきた」（『バプテスト教会の形成』）。

「教会総会」と聞いてワクワクしますか。それとも「どうして総会なんて必要なんだろう？」という疑問の方が大きいでしょうか。「牧師や執事会にお任せで決めてもらった方がずっと楽なのに」と思っている方もいるかもしれません。

バプテストは、全会員が参加する教会会議を大切にします。「総会」だけでなく、さまざまな報告を聞き合ったり相談をする「信徒会」や「常会」を設定している教会も多いようです。それらの教会会議の場が、皆さんの教会の場合、「キリストのからだ」を生き活きと実感する場になっているでしょうか。

豊かで、ユニークな神さまの世界へ

私がバプテストの素晴らしさを感じるのは、一人ひとりが主のみ心を尋ね求めて、それを

言葉にし、互いに聞き合うことを大切にしているところです。バプテスト教会は、教会を形成する一人ひとりが大切にされます。誰一人必要でない人はいないし、誰もが違った賜物を発揮してひとつの教会を形作っています。ゆえに、どんな人もそれぞれの立場で考え、自分の意見を互いに交わすのです。そして、その対話というプロセスの中でバプテスト教会は、神さまのご計画を尋ね求めていくのです。一人ひとりが「わたし」の思いを語っていきながら、そこで「主」の思いを聴き取っていこうと努力する。教会員になって間もない人も、小学生であっても、違った一人ひとりの言葉を聞き合うことを通して、教会はより豊かで、ユニークな神さまの世界へと広がっていくことができるのです。

強いられてではなく自覚的に

そのような教会は、みんなに分かるように情報を共有するのに労力があるし、違った意見をまとめて、先に進んでいくのに時間がかかります。同じことを何度も説明しなくてはならなかったり、およそ効率的にはいかなかったりするものです。しかし、そのようなプロセスを通して、一人ひとりが教会のことを自分の事柄とし、自覚的に考え、キリストに従うものとして生きる生き方を選んでいく。そこにバプテストの素晴らしさの2つ目があります。人任せにはしないのです。バプテストゆえの大変さも多いのですが、楽しさや喜びもまたあふれてきます。そしてまた、たとえその努力が報われなかったとしても、その源が「神を愛し、隣人を愛する」主の愛であるのならば、それもまた喜びへと変えられると信じるのです。

共に！神の国の食卓へ

テレビ番組のドキュメンタリーで、貧しさの中にあるハイチの12歳の少年が「ぼくにとってデモクラシーとは分けることなんだ（ひとつの皿をみんなで分け合って食べる）」と言っていました。その少年はわずかな食料を分け合って食べる神の国の食卓を教えてくださいました。バプテストが大切にする「民主的教会運営」とは、「わたし」の意見の主張の場でも、「多数決」の尊重のことでもありません。神の国に仕える教会として、神の国の食卓の分かち合いを喜んでいくことなのです。

柴田良行

民主的教会運営

―神の国の食卓の分かち合い―

a あなたの教会の会議では、主のみ心を共に尋ねていくためにどんな工夫がされていますか？

b 会議を通して「神の国の食卓を分かち合う」とはどういうことでしょうか？

「今、バプテストの教会を建てる」

第15回

メンバーシップと献身

「全員野球」という言葉があります。全員が心ひとつとなつて貢献し合うチームという意味ですが、まさにバプテストの教会こそそのようなチームづくりを目指している群れと言えるでしょう。ひとりで生きてきた人がイエスと出会い、「仲間に入れて！」と飛び込んでいく。チームメイトも新メンバーを喜んで迎え愛していく。教会はそんな素敵な愛のチームのはずです。ところがレギュラーが固定していて若手の活躍の場がなかったり、選手の育成よりも球場整備にばかり力を入れていたりといったことも、教会の現場で起こっているかもしれません。今回はバプテストの教会を建てる上で大切な「メンバーシップ」と「献身」について考えてみたいと思います。

互いに愛する「かぞく」となる

新しく家族に加わる赤ちゃんにとって最も大切なことは何でしょう。それは親や兄姉から十二分に愛を受けて、「自分はひとりではない。愛してくれる家族がいるのだ」と知ることではないでしょうか。教会でもそうです。新生したメンバーが「教会は安心して飾らない自分でいられる我が家」と思えるまで、主にある兄弟姉妹に愛される必要があるでしょう。もっともいつまでも子ども扱いしたり、本人もそれに甘んじたりしているのも良くありません。子どもは成長に応じて役割を与えられることで、自分も家族を愛する者となり、神の家族の一員である喜びを味わうことでしょう。

最高の「かおり」をみんなで献げる

旧約の時代、民は生贄を燃やして最高の香りを主に献げて礼拝しました。では私たちが主に献げる「バプテストの香り」とはどのようなもののでしょうか？ 教会のメンバーは各々その人らしい独特の香りを持っているものです。ほとんどわからないほど弱くかすかな香りの人もいるでしょうし、逆ににおいが強くて気になる人もいるかもしれません。けれども、一人ひとりが生活の中でキリストの香りを放ち、互いのほのかな香りをかぎとって喜び合うとき、私たちはそれぞれの教会ならではの絶妙に調和された香りを主に献げる「献身者の共同体」とされていくのではないのでしょうか。

「からだ」を献げる

「献身」という言葉を聞いて何をイメージしますか？ 献身とは個人的なこと、牧師や宣教師など特別な道に進むことだと感じている方も多いかもしれません。ところが「あなたがたのからだを神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それがあなたがたのなすべき霊的な礼拝である」と聖書はあくまで教会全体に献身を呼びかけています（ロマ 12・1、口語訳）。つまり私たちの生活そのものが神に献げる礼拝であり、教会は日々礼拝者として生きる私たちが一体となって献身する共同体なのです。

教会が一丸となって献身していくためには、新しい方を連れて来る人、働き人を育てる人、新たな働きへと送り出されていく人、リーダーを愛し支えていく人、新たな群れを開拓する人、ひたすらとりなし祈る人など、さまざまなメンバーが必要です。こうして私たちが分け与えられた賜物を活かして共に仕えるとき、教会は神に献身する者たちの愛の家族として、キリストの香りを世に放っていくのです。このような素敵な教会を共に建てていくかけがえのないメンバーのひとりとして、今あなたにできることは何でしょうか。

田坂元彦

メンバーシップと献身

a 教会員であることをどのようなときにあなたは意識しますか？

b あなたならではの「献身」の形とは、どのようなものなのでしょうか？

「今、バプテストの教会を建てる」

第 16 回

執事・役員 ―バプテストの信徒―

『新生讃美歌』に記されている「教会の約束」には、「わたしたちは、教会は人によって成ったものではなく、神によって成ったものと信じます」という文言があります。私たちは、実際にどのような場面で、このことを信じるのでしょうか。色々な場面があるかも知れません。私は個人的に、「教会の執事・役員選挙」の場面において、そのことが問われているのではないかと考えています。

人が考え、人を選ぶ方法

執事・役員は、教会の中で核となる大切な働きです。執事・役員を選ぶ方法は、教会においてさまざまかも知れませんが、民主的な教会運営のために、執事・役員を選挙という形で選ぶ教会は多いと思います。そのような中で私たちは執事・役員選挙にどのような思いで臨んでいるのでしょうか。選挙で人を選ぶことは、実に人間的なやり方と言えるかも知れません。そこでは、人が考え、人を選ぶのです。ともすると、人の思いばかりが際立ってしまうことがあるかも知れません。実際、人から「そろそろ君が選ばれるね」と言われ、選挙に選ばれることが「自分が周りから認められた証」のように思えて戸惑ったという方や、選挙で自分が選ばれなかったことで、周りから認められていないような思いにさせられたという方もいました。

人の業が神の出来事に

選挙という行為は、確かに際立って人の業であり、人の視線を感じないでいられないかも知れません。しかし、私たちは、そのような選挙という事柄の中に、神の出来事を見ていく…。そこに「教会は人によって成ったものではなく、神によって成ったものと信じる」信仰が問われているのではないのでしょうか。ですから、私たちは、選挙の際に自分の思いや好みではなく、祈りの中で「主が望まれる方は誰だろうか」と聞きながら選ぶことが大切ですし、選ばれた際も、人によって選ばれたことよりも、「主が自分を大切な働きに召された」という思いで受け取っていくことが問われているのです。そのように、そこで選ぶのも、選ばれるのも人であるかも知れませんが、互いに主を見上げていく…。そのような中で、選挙という人の業が、真に神の出来事となっていくのではないかと思うのです。

み業を起こし続けてくださる方

ある方はさまざまなご事情の中で、選挙の最中に「自分が選ばれたら大変だ」と思い、牧師に「自分が役員に選ばれないようにしてほしい」と願い出ました。牧師はその方の事情が分かっていたのですが、「まだ選挙の結果が出たわけではありませんから、主のみ旨を祈りましょう」と言いました。結果、その年の選挙では選ばれませんでした。しかし、次の年にも選挙があり、その方は同じように牧師に願い出ました。牧師の返答は同じでした。すると、その年の選挙では選ばれたのです。その方は困ってしまいましたが、「これだけ祈って選ばれたのだから、全部主に委ねて引き受けよう」と決心しました。結果、一つひとつのことが守られ、働きを無事担うことができたのでした。

教会は人によって形づくられています。しかし、その中で実際にみ業を起こし続けているのは、主であると信じます。教会は人によって成ったものではなく、神によって成ったもののなのです。

鈴木牧人

執事・役員

—バプテストの信徒—

a 執事・役員選挙にどのような思いで臨んでいるのでしょうか？

b あなたにとって、「神によって成る教会」を思うのは、どのような時ですか？

「今、バプテストの教会を建てる」

第 17 回

バプテストと平和 —主告白に生きる群れ—

沖縄・辺野古の現場で

2005 年少女少女「隣人に出会う旅・沖縄」、真夏の辺野古で基地建設阻止行動をしている方々と出会いました。それは張り詰めた緊迫感に包まれていました。海上のやぐらにしがみ付き、小さなカヌーで、頑丈な何隻もの船が近づかないように守っておられるのです。私た

ちは用意された舟でその衝突の現場に向かいましたが、推進派の立ち退きを迫る怒号渦巻く中で、ただ何もせずに周囲を周るだけでした。言葉を失いました。出会っているのに、かける言葉がないのです。そこは「いのち」のせめぎあいの現場であり、本来ならば本土の私たちの現場であるはずです。無関心、無視、見捨て…。恥ずかしさに震えました。その辺野古の海での出会いは、本土と沖縄の歴史をそのまま映し出す構図だったのです。

裏切られ続けてもなお！

その日の夜、辺野古での活動を終えられた平良修牧師が、少年少女のために講演の冒頭で語られた言葉が心に刻まれています。海上にいた方々が反対行動を終え、砂浜のテントに戻った時に、「今日、若い中高生がこの現場を見学に来た。彼らもまた、平和を担ってくれと信じている。彼らに応援の思いをこめて拍手しよう！」と、一日中、厳しい海上で闘い続けて疲れきった方々たちの両手から、私たちへの拍手が辺野古から鳴り響いたということです。

参加者は静まり返ってこの言葉を受けました。罵倒されてもおかしくないのに拍手されるなんて。しかも、そんな私たちに、「徹底的に主イエスに従おう！」と平良牧師は語り抜かれるのです。何度も裏切られ続けた歩みの中で、それでもなお、信じ期待しているとのメッセージを全身でぶつけてくださったのです。

応答の「告白」

ある参加者が旅で与えられた気づきを伝えてくれました。「隣人になろうと沖縄に来たけど、実は沖縄の方がずっと前から隣人になろうとしていたこと、しかし何度もその期待を日本に裏切られてきたこと、だけどまだ日本を信じている沖縄がいたことに気づかされました」。これはまさに、辺野古で鳴り響いたあの拍手への応答の「告白」そのものです。あの拍手は、悔い改めて新しく生きる一人ひとりの応答の「告白」を導いたのです。

礼拝から平和が

—主告白に生きる群れ—

私たちバプテストは、「主告白」に生きる群れです。裏切られてもなお愛し続けられる主イエスの十字架の赦しの前に揺さぶられ、悔い改めて新しい応答に生きる。私たちがバプテ

スマを受けたときにそうであったように、毎週の礼拝で主のみ言葉に新たに出会い、揺さぶられ、「主告白」を生きる者とされるのです。そして、その「主告白」は、今日も私たちの間で平和をつくり出しておられる活けるキリストとの出会いと重なっているのでしょうか。

「もう、命を奪う爆撃機が沖縄から飛び立つのには耐えられない!」。炎天下の中で座り込みを続けていた辺野古の「おじい・おばあ」の叫びと、辺野古に鳴り響いた平和への拍手が、あなたの礼拝でも響いているのでしょうか。

柴田良行

バプテストと平和

—主告白に生きる群れ—

a あなたの「主告白」は毎週の礼拝でどのように新たにされていますか？

b 「主告白に生きる群れ」としての教会が招かれている「平和」の働きはどのようなもののでしょうか？

「今、バプテストの教会を建てる」

第 18 回

牧師 —神に召された同労者—

罪人を牧師に召される主

就任時に「頑張ってください」と声をかけてくださった教会員に「一緒に頑張りましょう」と答えて 6 年。教会家族から愛され祈られながらも多くの人を傷つけてしまい、「自分が牧師でいいのか」と問う毎日でした。でももし牧師として立たされていなければ、聖書も読まず祈りもせず人の痛みもわかろうとしないままだったでしょう。そんな私をも（だからこそ？）牧師として召し抱えてくださった主と教会を心から愛します。

達人の招聘か？ 同労者の擁立か？

数カ月の教会での研修を通して互いを知り合う機会に恵まれた後、その牧師として立てられた私は、外部からの招聘と教会内からの擁立とが半々といった感覚でした。また5年間牧師がいなかったこともあって、何でもできるイエスさまのような姿を期待する人から、牧師という見慣れぬ存在に戸惑っている人まで実に多様でした。その後6年を過ごす中、何でもやる達人としてではなく、共に失敗を重ねながら信頼関係を築いていく同労者として、ようやく歩めるようになってきた感じがします。教会の中には、神学校を出ていなくても、フルタイムでなくても、群れの中から牧師を立てる教会もあります。あなたの教会では牧師はどのような存在でしょうか。

牧師の役割

…主に仕える僕を整える

聖書で牧師という語は一回しか登場しませんが（「キリストご自身が、ある人を使徒…預言者…伝道者…牧師また教師として、お立てになった」エペソ4・11・新改訳。新共同訳は牧者）、続く節にあるように「聖徒たちを整えて奉仕の業をさせ、キリストの体なる教会を建てさせること」が牧師の役割といえるでしょう。ちなみに私は名刺に「僕司(ぼくし)」と肩書を載せています。僕の一人として率先して仕えつつ、一人ひとりの力を引き出し、一致して仕える僕のチームを整える働きこそ、バプテスト教会の牧師の使命と信じているからです。

牧師に何を委託する？

私の場合は教会からみ言葉の取り次ぎと祈り、礼典の執行、ビジョンの共有と教会員の霊的成長を促すことなどを委託されています。しかしこの6年間、本来託された働きよりも、週報作成をはじめとする管理運営に多大な労力を割いて、教会員の大切な働きを奪ってしまっていました。悔い改めて今、大幅な軌道修正を図っているところです。委託事項の見直しも適宜必要でしょう。たとえば牧師の説教が難解なら解説者や信徒説教者を立ててもよいのです。互いの説教を聞き、果たしてその通りか牧師と一緒に聖書を調べ、神に聞いていく。そうやって、牧師の賜物が生かされる教会形成があってもよいのです。

牧師家庭と教会のケア

牧師にも家庭があり、安息が必要です。単身世帯でも家庭はありますし、家族が必ずしも

クリスチャンとも限りませんから、配慮を必要とします。特に牧師やその家族に過剰な期待を寄せたり特別扱いしたりしない、住居や待遇は一方的に決めず話し合う、牧師や家族も無理や我慢をしたり、特権に甘んじたりしない。これらは大切な教会のスチュワードシップです。

牧師を愛し守っていくとき、教会も守られていきます。あなたの教会では牧師家庭にどのような配慮をしていますか。

田坂元彦

牧師

—神に召された同労者—

a あなたの教会は牧師に何を託していますか？

b あなたの教会での働きは何ですか？

「今、バプテストの教会を建てる」

第19回

教育・訓練 —主に聞くとき、育まれるとき—

Aちゃんのこと

以前、Aちゃんという自閉症のお子さんが教会に来ていました。教会には同世代の子どもたちが何人かいたのですが、皆、まだ幼くて「障害」というものを理解できず、Aちゃんを仲間外れのような形にしまったり、皆が騒ぐ勢いでドンと押してしまったりすることがありました。その様子を見たAちゃんのお母さんである教会員は「娘を教会に連れて来ないほうがいいのか」と思いました。私は姉妹の思いを察しつつ、こう話しました。「おそらく、周りの子どもたちは、Aちゃんと、どんなふうに関わっていいのか分からないのだと思います。できれば、子どもたちにAちゃんのことを話してくれませんか」。すると、その姉妹は最初「考えさせてください」と言いました。しかし、しばらくして了解してくださり、日曜日の教会学校の時間に話してくれることになりました。姉妹は、本当によく準備して、分かりやすく、Aちゃんの様子や接し方などを話してくれました。子ど

もたちもそれを真剣に聞いていました。その後、子どもたちのAちゃんへの関わり方が変わり、Aちゃんは教会での時間を楽しんで過ごしてくれるようになったのです。

祈った結果の決心

私はその様子を傍らで見ながら、子どもたちが姉妹の話を真剣に聞いている姿や、彼らなりにAちゃんのことを考えている姿に学ばされました。そして、何より姉妹の姿に学ばされました。本当は子どもたちに話をするのも悩んだと思いますし、躊躇する思いもあったと思うのですが、祈った結果、「話そう」と決心してくださったのです。私は、このことを通して、共に生きること、育まれることの原点を教わったように思います。

共に生きようとする過程において

教会で私たちが学ぶことは、たくさんあります。ただその中でも、私たちが主に結ばれたお互いとして、共に生きようとする過程において、たくさんのことを学ぶのではないのでしょうか。教会の交わりには色々なことがあります。時に価値観や考え方の違う互いを知らされ、驚き、戸惑うことがあるのではないのでしょうか。そんな時、私たちは、つい「問題だ」というところで止まってしまうことがあるかも知れません。でも、その時こそ、共にみ言葉に聞く機会が与えられているのではないのでしょうか。そこで立ち止まり、み前に静まり、祈り、み言葉に聞いていく時、今まで気づかなかった相手の声が聞こえたり、主の取り扱いを経験することがあるのだと思います。そして、最初は「問題だ」としか思えなかったことを通して、互いに豊かに学び、成長できるかけがえのない時を通ることがあるのではないのでしょうか。

主が出会わせてくださった一人

連盟の教会学校の目的には、「その活動を通して一生の全領域において主に聞き」という文言があります。この文言は、私たちの日々のあらゆる出来事の中に、「主に聞く大切な機会」が埋もれていることを呼びかけているのだと思います。私たちは、日々のさまざまな機会、主に聞き、育まれていきたいと思います。その時、人との出会いや交わりなどさまざまな機会を通して、主に聞く時が与えられるのではないのでしょうか。そのような私たちが、互いに主の教会として建てあげられていくのだと思います。

鈴木牧人

教育・訓練

—主に聞くと、育まれるとき—

●教会生活や日々の歩みの中で、主に聞いたという証があれば話してみましょう。

「今、バプテストの教会を建てる」

第 20 回

礼拝・説教—共に建てあげる—

教会に与えられた説教

「説教は牧師の専売特許!」。どこかにそんな意識はありませんか?

バプテストの説教は「牧師のもの」ではなく「教会のもの」です。教会は礼拝共同体として神によって集められ、み言葉を聴き取り、語る奉仕へと召されている群れです。バプテストはその群れの中から、説教奉仕者を立ててきましたが、そこでは教会に集う一人ひとりがその主体として説教に参加し、担うのです。ですから、説教奉仕者（牧師だけでない）は、群れの上に何らかの権威をかざして語るのではなく、群れの中に共に立ち、その交わりの中でみ言葉を聴き取っていくことが求められます。説教は決して書斎にこもって書きあげられるのではなく、喜びも悲しみも入り交ざった教会共同体のさまざまな出来事の中で紡ぎあわされていくのです。

共に建てあげる説教

私が属している教会で、数名の教会員に説教をお願いしたことがあります。比較的説教経験が少ない方々で、今回が初めての方もおられました。彼女・彼らは「説教」について共に事前学習し、熱心な準備と祈りと緊張感を持って説教に臨みました。教会員は各人の説教テーマを共有していましたので、説教が整えられていくプロセスの中でその説教者と「対話」しつつ、まさに自分のこととして祈りました。牧師である私もまた、説教者と原稿のやり取りを重ねながら、その中で説教の言葉が紡がれていく不思議な経験をいたしました。

礼拝では説教を教会全体で共に語り、共に聴く、そんな経験をいただき、説教が牧師にではなく、教会に与えられていることを体感できた貴重な経験でした。

問いへの応答

『バプテスト』誌2009年3月号の掲載記事に対して、福井教会牧師の西條由起夫さんから貴重なご意見をいただきました。ひとつは、「牧師の説教がつまらない」と感じるのは聞き手側だけの問題か？ということ、もうひとつは、説教を神の言葉として聞く、話すということはどういうことか？という問いかけでした。

「説教がつまらない」という言葉には、色々な思いが詰まっていそうです。「そんなこと言わないで、神さまの言葉なのだから！」と封じてしまうよりも、率直に口から出た感想をきっかけに「何がつまらないの？」と対話を始めていく。あるいは、説教箇所の新約聖書と一緒に開いてみて「自分だったらどんなメッセージを聴きとるだろうか？」という対話を始めていく。そして、その対話が説教者をも巻き込んで、教会における次の説教の題材につながっていく。そんなふうに、説教は教会の交わりを建てていくプロセスと考えることは出来ないでしょうか。

そういう意味で、「説教を神の言葉として語る、聴く」というときにも、語る者と聴く者との間に、聖霊によって開かれた健全な批判関係が作られていることが大切だと思います。語る者は神の言葉を取り次ぐ緊張と深い祈りをもってその奉仕に当たり、聴く者も同じような緊張をもって聴く。しかし、その説教が「良いお話でした…」で終わってしまうのではなく、キリストの教会のあり方を真剣に追求する、新たな対話や関わりを引き起こしていくとき、それは「神の言葉」となっていくと、そう思うのです。

柴田良行

礼拝・説教

—共に建てあげる—

● 「教会の説教」となるために大切にしていることは何でしょう。

「今、バプテストの教会を建てる」

第 21 回

国外伝道 ―国境なき神の国―

自立を重視すればするほど内向きになりがちなバプテストの教会は、異なる人々と積極的に出会うことでキリストにあって新しい群れとされていきます。今回は国外伝道について考えてみましょう。

国外伝道への参加 ①「受け入れる」

国外伝道と聞くと、どこか遠い国の話と思う方もおられるでしょう。でもすでに多くの教会がこれまで国外伝道の恵みにあずかってきたのではないのでしょうか。たとえば私が生まれ育った教会は、以前は単立教会でしたが、戦後來日したバプテストの宣教師たちの働きに感銘してバプテスト連盟に加わった教会でした。また今いる教会は、開拓期に米国人宣教師が牧師を務めていましたし、今でも毎年韓国から学生宣教チームが滞在して、日本人の友だちを作っては教会に連れて来てくれます。日本を愛し、多くの犠牲を払って伝道するチームの姿に私は心打たれるのですが、驚くことに「自分たちこそ日本の教会に励まされた」と感謝しながら帰国していくのです。このように、与える人と受ける人ではなく共に主から受け取る国外伝道の恵みに、あなたの教会ではどのようにあずかっていますか？

国外伝道への参加 ②「送り出す」

日本へ働きに来ていたインドの青年が私たちの教会へ通い始めてバプテスマを受けた後、インドへ戻りました。翌年ある教会員がインドの彼の教会を訪ね、喜びの証しを分かち合って帰ってきました。他にもバプテスマを受けて集中的な聖書の学びを積んだ青年が、米国人と結婚して現在は、ハワイの教会で用いられ、すばらしい証しをメールで寄せてくれています。

私たちバプテストは当初から国境を越えて出て行きながら信仰を確立していった群れでした。そして今日も「向こう岸へ渡ろう！」と招かれる主は、旅行、出張、留学、移住などの機会を用いて私たちを宣教の担い手として国外へ送り出されます。献金や祈りを通して、連盟派遣宣教師や国際ミッションボランティアの方々と共に国外伝道に参加する喜びに加えて、あなたの教会ではどんな形で証し人を国外に送り出しているのでしょうか？

国外伝道への参加 ③「ここから始める」

ある年、神さまは英語を話す方を次々に私たちの教会に送られ、英語クラスが始まりました。すると翌年、以前会堂を貸していた英語礼拝のグループから「礼拝の続行が難しくなった」と相談があり、一緒に祈った結果、教会の活動としての英語礼拝が再開しました。フィリピン人伝道の重荷を持つフィリピン出身の方、近くの独逸(ドイツ)学園に通うドイツ人一家など、自分にとっては日本で主を証しする生活＝国外伝道なのだという方々もいます。また近所にモスクがあり、断食月にはムスリムの救いを祈ります。

国外伝道は今いるところから始められます。あなたの教会はどうでしょう。身近な所に「国外」はありませんか？あるいは近くに「国外」があっても「自分には無理」と心の中に国境があると感じている方もおられるかもしれません。それならまず心の中の国外伝道から始めてみませんか。初代教会も同じ町に住む異邦人と福音を喜び合うことから始めました。私たちも国境なき神の国、誰もが一緒に喜べる教会を建てていこうではありませんか！

田坂元彦

国外伝道

—国境なき神の国—

a あなたの教会は国外伝道にどのように参加していますか？

b あなた自身は国外伝道にどのように参加していますか？

「今、バプテストの教会を建てる」

第 22 回

協力伝道 —共に建てあげる—

本当に自立している人

郡山コスモス通り教会は、2008年全国拠点開拓支援の伝道所から教会組織をしました。そんな中、私はこれまで郡山教会の牧師として「教会の自立」というテーマに度々向き合

わされてきたように思います。私は郡山に赴任した当初、教会の自立とは「自分の力で立つこと」(財政的にも教会の運営でも、他の助けを借りないで、自力で立っていくこと)だとばかり考え、一刻も早く「そうならなければ」と考えていました。

しかし、ある時、新聞に紹介されていた言葉に目が留まりました。「本当に自立している人というのは、どんなささいな犠牲でもそれが当たり前ではないということをきちんとわきまえている人」。私はハッとしました。それまでの自分は、自立という時、それを、自分の内側の事柄ばかりでとらえていたのではないだろうか…。しかし、本当の自立とは、周りとの関係に生かされていくことだと気づかされたのです。その中で自分たちに関わってくださった人、自分たちを支えてくださった人を覚え、その人たちが献げてくださった尊い働きが当たり前ではないとわきまえることだと気づかされました。実際、教会組織の準備を通して、これまでの歩みを振り返り、さまざまな支えや尊い働きを改めて心に刻む経験を度々通らされました。

自立から協力へ

自立していく中で、財政的に独り立ちすることは大切な事柄です。しかし、力をつけて、ある程度自分たちで色々なことを行えるようになって、やはり自分たちだけで歩んでいくわけではありません。周りの支えなしに歩むことはできないのです。本当に自立した人は、そのことをきちんとわきまえている人です。自分たちが今も支えられていることを知り、その支えが当たり前ではないことをわきまえている人なのです。そして、そのようなことを自覚することの先に「支え、支えられていく歩み」に導かれていくのではないのでしょうか。私たちは、自立の過程の中で本当の協力関係を築いていくのではないかと思います。

2008年度の連盟定期総会で、郡山教会は連盟の加盟教会として認められました。帰りの車中、ひとりの姉妹がおっしゃいました。「伝道所の始めのころ、東北連合の方たちが、よく私たちの集会を助けに来てくれた。日帰りでお手伝いに来てくださり、何も言わずにさらっと来て、さらっと帰って行かれたこともあった。そんな支えに本当に助けられた」。そこで自分たちも何かしていけたらいいねという意見から、「酒田に行こう」ということになりました。早速、酒田のぞみ伝道所の藤井秀一牧師にお話をし、酒田の集会に参加させていただくことになりました。去年は、春と秋の2回、酒田に行かせていただきました。何ができたわけではありませんが、教会自立の過程の中で、新たな協力関係が起こされたことは何より感謝なことでした。

恵みに生きる歩み

私たちは困難や課題の前に立たされる時、自分たちのことで一杯一杯になり、自分たちだけで何もかもしているかのような思いになったり、自分たちだけが苦勞しているような思いになってしまうことがあります。そんな時こそ、自立と協力の歩みに招かれていくことを覚えていたいと思います。その時、私たちの働きは、ひとりの働きではなく、共に労苦をする恵みの働きに変えられていくのです。

鈴木牧人

協力伝道

—共に建てあげる—

a あなたの教会が周りとの関係に生かされていると実感することはありますか？

b 自立と協力の歩みについて話し合ってみましょう。

「今、バプテストの教会を建てる」

第 23 回

信仰の課題としての「信教の自由」

2月 11 日の「建国記念の日」を日本バプテスト連盟では「信教の自由を守る日」と呼び、連盟事務所も休日ではなく出勤日にしています。皆さんの教会では、この日をどのようにして自分たちの信仰の課題とし、取り組んでおられるでしょうか。

「建国記念・靖国神社」と
「信教の自由」

日本国憲法第 20 条はすべての国民に「信教の自由」を保障すると同時に、宗教が国から特別な利益を付与されることも、国が宗教活動に関与することも禁じる「政教分離の原則」が明示されています。この憲法の文言は、かつて大日本帝国が国民を「天皇」の臣民とし

て教育するために国家神道を利用し、侵略戦争に駆り立てていった反省のもとに制定されたものです。

にもかかわらず、1966年、政府は2月11日（天皇神話の「紀元節」）を「建国記念日」として制定し、その翌年にはかつての大戦で戦死した兵士たちを「英霊」として祀る靖国神社を国家護持する「靖国神社法案」を国会に提出しました。そのため、多くのキリスト者が反対に立ち上がり、私たち日本バプテスト連盟でも、靖国神社問題を「主告白」の課題として受け止め、反対運動の取り組みが始まったのです。

なぜ信仰の課題なのか？

それに対し「教会が政治的なことがらに関わるのは良くない」「伝道にマイナスだ」という意見も少なくありませんでした。なぜ、靖国神社問題が、私たち教会の信仰の課題なのでしょう。

それを考えるためには戦前の教会の歴史を知る必要があります。

日本が「大東亜共栄圏」の大義名分のもとでアジア諸国への侵略を正当化していったとき、教会は戦争に反対するのではなく、むしろ支持しました。朝鮮半島の人々に皇民化教育をするため、半島各地に護国神社が建てられた時には、参拝を拒否する朝鮮人キリスト者に対して「神社参拝は主告白と矛盾しない」と説得もしています。「私たちは…信教の自由・政教分離を主張すべきバプテストでありながら、かえって国家を神の国と同一視し、アジア侵略を神が祝福される領土拡張として単純に受け入れ」（『戦争責任に関する信仰宣言』1988年）、その「主告白」において大きな過ちを犯したのです。

「主告白」を生きる

イエス・キリストの十字架に示された和解の福音を信じ、生きる私たち教会は、「神の国」到来を待ち望みつつ、その先取りとしての平和を実現するために祈り、行動する者として、この世に派遣されています。「政治的なことには関心がない。私のキリスト教信仰と、教会の伝道活動が守られればいい」という信仰は、十字架のイエス・キリストに従う信仰として歴史に耐えうるのでしょうか？ 2月11日「信教の自由を守る日」に、この時代、この世界に派遣されている教会の責任をご一緒に考えたいと思います。

＊参考〔日本国憲法 第二十条〕

信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

2 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

3 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

柴田良行

信仰の課題としての「信教の自由」

● 「信教の自由」はなぜ信仰の課題なのでしょう？一緒に考えてみましょう。

「今、バプテストの教会を建てる」

第 24 回

献金 一ささげる生活―

十分の一で主を愛するバプテスト

初めて小遣いや給料の十分の一を主にお返しした時の感動を私は忘れられません。今でもささげるたびに心は喜びであふれます。「神と富とに仕える」(ルカ 16・13) ことの多い私たちですが、預かった富をささげることを通して神と喜びを共にできるのは何と幸いなことでしょう！ 十分の一を返すとき「天の窓を開きあふれる祝福を注ぐ」(マラキ 3・10) という主の約束を信じてささげていきましょう。

とはいえ退職等で収入が減ったり、年金受給が始まって収入が2カ月毎になったりした方の中には、ささげられる額が減っていく現実を喜べない方もおられることでしょう。また年俸制や非正規雇用が増えつつある中で、賞与を前提とした特別献金等への呼びかけにも配慮が必要かもしれません。

私のいる教会では開拓当初から個人の献金袋がありません。代わりに「十分の一とささげ

もの」「感謝献金」「会堂献金」といった備え付けの封筒に入れて無記名でささげています。多くの教会では、教会員のメンバーシップ意識を大切にして記名式の献金袋を用いておられることと思いますが、いずれの方法においても、十分の一とささげものは、私たちが主の愛を実感し、主への愛を表し、教会を建てあげていく大きなチャンスです。この機会を大いに活かして、バプテストの教会を建てていきましょう。

また十分の一はバプテスト共同体みんなで喜び合えるものでもあります。すべての教会・伝道所が「祈りと励ましの標準比率」を達成したとき、どれほどの喜びが天地にわき起こり、あふれる祝福を主が注いでくださるでしょうか。その日が今から楽しみです。

献金で隣人と助け合うバプテスト

10 年間、貸ビルの一室で礼拝していた私たちの教会は 7 年前、初めての会堂を建設しました。その後、教会債と回転資金の返済を精一杯続けてきましたが、資金が底を尽きかけた時、感謝なことに連盟の不動産取得支援（500 万円）の連絡が届き、すぐに送金していただいて救われました。きっと多くの教会が過去にこうした協力伝道の支援、また母教会や米国等からの支援を受けて今日を迎えていることと思います。また自立と協力を喜ぶバプテストは、支えられるばかりでも支えるばかりでもなく「支え合う」群れといえるでしょう。母教会として伝道所開拓を支援したり、協力伝道献金を通して未伝地開拓等に関われることは私たちの大きな喜びです。

全生活をささげるバプテスト

私たちバプテストが全浸礼を重んじてきたのは、自分たちの一部だけではなく「すべて」を神さまに明け渡す信仰を大切にしてきたからに違いないでしょう。実際、私たちが主にささげられる生活は経済生活や教会生活だけではありません。家庭生活や地域生活、職業生活や学校生活、衣食住や消費生活など、全生活をささげて主の喜びにあずかることができます。

さあ、あなたも今日から始められます。ささげる生活を通して、主の栄光を現すバプテストの教会をご一緒に建てあげていこうではありませんか！

田坂元彦

献金

—ささげる生活—

a あなたの教会はどのような献金の仕方を選び取っていますか？

より喜んでささげられる方法があるとするれば、それはどんな形でしょうか？

b 「ささげる生活」とは、あなたにとって具体的にどう生きることですか？

Ⅲ バプテストの信徒を生きる

「バプテストの信徒を生きる」

第 25 回

明日を開く鍵 —信徒の教会—

今、教会に求められているもの

この時代に私たちの教会に求められているものをあえてひとつだけあげるとするならば、「信徒の教会を形づくること」と答えたいと思います。これから 12 回、このコーナーでは、どのように信徒の教会を形づくるのか、実際に、バプテストの信徒を生きている方々からの声を聴いていきます。

バプテスト教会は「信徒の教会」

なぜ今「信徒の教会」なのでしょう。これは近年、他派でも、また世界的にも言われ始めていることです。教職者、聖職者の減少が深刻化し、「教職者がいなくて、信徒だけで教会が成立するのか？」という問いのもとで、それまでの「教職者の補助役としての信徒像」を打破し、「信徒も説教や牧会、伝道を担うため」のテキストを作りはじめた教派もあります。

その点で、バプテスト教会は 400 年前に誕生したときから「信徒の教会」としての意識を強くもってきました。牧師も、牧師の役割を担う「信徒」です。そこには「霊的に価値

が高い、低い」といった上下は何もありません。(ただ、このコーナーで「信徒」と言う時には、多くの場合便宜的に、牧師以外の信徒のことを念頭に置いていることをご了承ください) ですから、私たちが「信徒の教会」であり続けることを目指すのは当然のことです。

なぜ今「信徒の教会」なのか

ただ、日本でのバプテストの伝道を思う時に、いよいよ本格的に「信徒の教会」となっていくことが求められていると言えるでしょう。教会の開拓期、第1世代は、牧師や宣教師が強いリーダーシップを発揮して人々を集め、教会を形成していく面がありますが、それが第2、第3世代の時代になると、信徒たちが主体的に教会の働きを担い、その働きと一緒に担ってもらうための牧師を招くことになります。しかしまだ、第1世代の教会や牧師のイメージからの切り替えがうまくいっていない場合が多くあるようです。

例えば、牧師の「任期制」を採用する教会で、任期更新に際して、牧師の説教や牧会のあり方は評価され批判されても、教会員一人ひとりの教会を担う姿勢が評価されたり批判されることはほとんどないようです。牧師の責任は問うけれども、自分たち信徒の責任は問わないという関係の中で、牧師と信徒の責任あるチーム形成はできるのでしょうか。あるいは信徒が「牧会や伝道を担う」とは、具体的にどういうことなのでしょう。実際どのようにお隣の教会では信徒の教会を形成しているのでしょうか。

次回からは4人の信徒の方に「バプテストの信徒を生きる喜び」「信徒と牧師の協働」「教会と仕事／主日と週日」といったテーマでご自分と教会のことを語っていただきます。

「神学は、『平信徒』は神学者でないという…口上を語るのを、静かに拒むであろう。…すべてのキリスト者自身が、自分を神学者として理解しなければならないという帰結は、極めて当然のことである」(カール・バルト『教会教義学』)。

濱野道雄

明日を開く鍵

—信徒の教会—

- a バプテスト教会にとって「牧師」「信徒」の違いは何でしょうか？
- b あなたの教会が「信徒の教会」であることを確認できるのはどのようなところですか？
- c 「信徒の教会」であることの喜び、豊さはどこにあるのでしょうか？

「バプテストの信徒を生きる」

第 26 回

『たまたまバプテスト』からの出発

私は 20 歳の時、以前からのキリスト教への関心から教会の門をくぐり、3 カ月後に催された特別伝道集会で入信を決意しました。その教会は、多くの人がそうであるように、「たまたまバプテスト」教会でありました。もちろん、入信時には、「バプテスト」の歴史や主張について教えていただきましたが、キリスト者になることで頭がいっぱいで、正直なところあまりバプテストについて意識することはありませんでした。

教会観をただされて

その後の信仰生活、教会生活を進める中で、牧師の交替とその間の無牧師（無牧ではなく）の時期を経験し、「牧師とは」「信徒とは」、という問いを与えられるとともに、信徒による説教などを経験して、牧師のいない教会の可能性にも目を開かせられました。また、新たに赴任して来られた牧師に、いい加減な私の教会観を厳しくいただきました。当時の私はその厳しさに対抗して教会に通い深夜に及ぶまでよく議論しましたが、そのことを通して「教会のこととする」ことをいつも意識するようになりました。

さらに教会が教会組織をしてから 31 年経った時点で、信仰告白していく群れとしての共通のことばとわざを新しく創るという積年の課題に、1980 年から 5 年を費やして取り組んだこと、特に、「ヤスクニ」の課題を教会の信仰告白文に明記することについて、激論をたたかわせることなどを通して、教会員各人の信仰が問われ、信仰的に成長した経験がありました。

一方、自分の教会に限らず地方連合、連盟などの働きに関わる中で、多くの牧師、信徒の方々の信仰に触れ、励ましを受け、時には悔い改めも迫られました。

バプテストを体験する

以上、私の教会生活、信仰生活における歩みと出来事の一端を述べてきましたが、それは「たまたまバプテスト」から出発した私が、教会の業に取り組む中で、バプテストの信仰の特色である自立的、主体的信仰告白と会衆主義、および政教分離の主張の意味するところを体験するプロセスでありました。本気でバプテストの信仰に生きるチャレンジを受けるとき、時間はかかりますが、私たちはその素晴らしさを体験できるのだと、私は確信しています。

私にとって、バプテストが素敵だと思えるのは、主体的、自覚的な信徒による教会形成＝信徒の教会形成です。信徒（牧師も信徒の一人）は互いに上下関係を持たず、自由で活発な意見交換し合い、皆でワイワイ言いながら合意形成し、総がかりで教会の業を担っていくこと、お互いの違いを認め合い、まさにキリストの体としての教会を建てあげていくことが、バプテストの1番の良さだと思っています。と同時にバプテストの信徒には大きな責任が委ねられていると思います。それは主日礼拝から派遣されていく週日の、生活の場で主を証する務めであり、牧師の献身と共に、信徒の献身ともいえるものだと思います。

バプテストを喜ぶだけでなく、信徒の教会であるバプテストは、神さまから今どのような世界を創造しなさいと告げられているのかを、しっかりと聴き取り、教会で実践していく歩みが求められているのではないのでしょうか。

「教会は他者のために存在するとき、始めて教会なのである」（ボンヘッファー）。

渡邊 亶(まこと)

『たまたまバプテスト』からの出発

- バプテストを個人的に捉えるのではなく教会という視点で考え、

その特徴（良さ、素晴らしさ）を分かち合ってみましょう。

「バプテストの信徒を生きる」

第 27 回

バプテストの信徒でよかった！

私はバプテストの信徒

私は主体的にバプテスト教会を選んでバプテスマを受け、教会員になった者ではありません。自宅に 1 番近いキリスト教会がたまたまバプテストの教会であり、その教会の信徒であった近所の友人に導かれて「たまたまバプテストの信徒になったクリスチャン」の典型です。あれから 20 数年、バプテストの教会員として信仰生活を続けてきて今、自分にはバプテストの信仰が 1 番似合っていると自負していますし、バプテストであることを誇りに思っています。自分がバプテストの群れのひとりであることを心から喜んでおり、導いてくださった神さまに深く感謝しています。

自分がバプテストであることを意識し始めたのは 10 年以上前に遡ります。ある牧師の「目の粗い網を教会員にかぶせて一定の方向へ引っ張っていくのが牧師のリーダーシップだ」という発言に、猛反発を感じたのがきっかけでした。神さまと私の間に（他者が、人間が）介入して来ようなんて冗談じゃない！ 憤りが去った後も、ほとんど反射的といっていいこの時の自分の反応は心に残りました。こと信仰のこととなるとつい過敏になってしまう私がいる、私にとって信仰って何なんだろう…。以来、信仰における権威や自由について、教会や教派について、考えたり意識したりするようになりました。

バプテスト派は権威を神にのみ置き、神の許で信徒は自ら聖書を読んで養いを受け、祈り、主体的に信仰を告白することを大切にします。かつては、幼児洗礼の否定を強調するラディカルさのゆえにキリスト者たちからも迫害されたという歴史を持っています。そんなバプテストの教義に深く共感し、苦しくてもその道を選び取ってきた先達の歩みに敬意を表し、私もまたそこに立たせていただきたいと願っています。

私は主の教会の部分

「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」。(I コリ 12・27)

バプテストの教会形成について考える時、具体的にそのあり方を思い描くことができる好きな言葉です。信仰生活、教会生活の中で、パウロのこの言葉に私はいつも戒められ励

まされています。——あなたという小さなパーツが欠けても幅を取りすぎても主の教会の働きに障りが生じる。パーツ同士が配慮しあい、分をわきまえつつ意識的に主体的に結び合っていないと教会になっていかない。イエスさまの良い香りを放つ教会になりたいんだと、あなたがたがひとつになることを神さまは期待しておられるのだよ——どんな場所でも誰とでも、喜んで共働していけるわけではない私、嫌なものから目を背け、煙たい人から距離をおきたがる私。そんな弱さを持つ私がイエスさまの身体である伊川教会を建て上げている、支えている！ み言葉から宣言を受けてそのように自覚できることは大きな喜びです。全部の「ひとつ」が大切にされる、これもバプテストの素敵なおところ、そう思います。

みんなでひとつの夢を紡ぐ

神戸伊川キリスト教会では年に1度、修養会「夢・伊川」を持ちます。今年で6回目の「夢・伊川 2011」は1泊修養会にしよう！とみんなで決めました。小さな教会は、小さなパーツの小さな夢が大きく結実していくのに小回りが利いて有利です。今年は神さまのためにどんな（大きな！）夢が語られるのでしょうか、何しろ「1泊分」も時間があるのですから。

鮫島 泰子

バプテストの信徒でよかった！

a バプテストの信徒であることを意識するのはどんな時ですか？

b 教会を建て上げている部分であることを実感したり、そのことが嬉しいと感じるのはどんな時ですか？

「バプテストの信徒を生きる」

第28回

お客よりも家族へ

バプテストと私の関係

私が小学生の時に両親が他教派からバプテスト教会に導かれたことが、私とバプテストとの出会いでした。社会人となり転職の際もその地でバプテスト教会との出会いが準備され

ていたことは感謝でした。ですから自らバプテストを選び取ったというよりも、教会の中で少しずつバプテストになってきたように思えます。それぞれの教会が教会学校を大切にしており、その働きの中で私自身も、共にみ言葉を分かち合う喜びを与えられてきました。

教会学校の豊かさを通して

私たちの教会では、これまで成人科（18 歳以上）を年齢別に編成していましたが、昨年度から成人科を 3 クラスに年齢を超えた縦割りとし、若い方から高齢者までそれぞれの人生の歩みの中で、み言葉を分かち合っています。分級のリーダー（クラスのコーディネーター）として、クラスメンバーの証しや、み言葉からの問いかけや慰めを聞き、お互いに語り合うクラスをメンバーと共に作り上げたいと願っています。リーダーが一方的に語るのではなく、一人ひとりのメンバーがみ言葉から聞き、その恵みと慰めを全員で分かち合っていこうとしています。リーダーは、「語るに早く、聞くに遅く」なりがちですが、パウロは「信仰は聞くことにより…」（ロマ 10・17 参照）と語っています。一人ひとりがキリストの言葉を聞き、与えられた恵み・慰めを共に喜び語り合う中で、福音が立体的なものとなっていくのではないのでしょうか。

バプテスト教会では 400 年以上前の設立当初から、共に聖書を読むということを、教会の重要な働きとして大切にしてきました。私たちの教会では 15 年程前からクラスリーダーが共に分級の備えが出来るように、祈祷会で『聖書教育』のカリキュラムに従って、牧師の奨励、出席者の語り合いをしてきました。現在は聖書箇所を理解する上で必要な情報・知識を牧師がレジメにまとめてくださり、一人ひとりがみ言葉に向かい、疑問点や、与えられた慰め・励ましのメッセージを分かち合っています。

信徒による牧会・伝道の間

成人科も同じように簡単なレジメを配布し、聖書箇所を共に読んだ後、7～8 分各自が聖書と向き合い、その後にみ言葉を分かち合うようにしました。私はクラスリーダーの役を担っているのですが、長時間沈黙が続くとリーダーもメンバーも重い雰囲気の中で、何かを待っています。もちろん、最初から最後まで沈黙で黙祷（？）で終わらないよう、メンバーに考える視点を提供したりしますが、メンバーの発言を待つことは本当に大変でした。突然、新来者がクラスに招かれることもあり、クラス運営を急遽方向転換することもあります。メンバーの方が良く理解してくださり、思いもよらず豊かな分かち合いの時を持つことを出来ることがあります。

成人科のクラス編成の変更も1年が経過し、クラスメンバーが少しずつですが語り合い、み言葉のキャッチボールをすることが出来るようになってきたようです。垣根を越えて共に聖書を読む喜びこそバプテストの特質であり素晴らしい事です。一人ひとりが教会学校の「お客」でなく、み言葉を中心に「家族」として参加し、語り合う、支え合うクラスをメンバーと共に作っていきたいと願っています。この教会学校の働きの中に、バプテストの特徴である「信徒による牧会・伝道」の業を進める大きな場があるのではないのでしょうか。

眞嶋 豊

お客よりも家族へ

a あなたの教会では新来者がどのようにして礼拝、教会学校へと結ばれていくのでしょうか？

b 教会学校で福音を共に分かち合うには、どうしたらよいのでしょうか？

「バプテストの信徒を生きる」

第29回

バプテストの信徒でよかった！

キリストとの出会い

私は無宗教のサラリーマン家庭で育ちました。両親の実家のお墓は曹洞宗のお寺にあり、お坊さんと結婚した従姉妹もいます。私は特別に信じていたものではなく、漠然と、バチが当たるとか、目に見えない世界はあるのだろうという感覚でいました。

教会に初めて行ったのは19歳の時で、学生時代に1年間の短期留学で暮らしたカナダの英国国教会でした。下宿先の女性を通う教会に一緒に行ってみたことがきっかけで、教会の青年たちに親しくしてもらい、平日も一緒に過ごしたり、スキー旅行に行ったり、カナダでの生活は教会のおかげで充実したものになりました。その仲間たちの信じているキリスト教に興味をもち、日本語の聖書を手に入れて自分で読むようになりました。人は死ぬのになぜ生きなければならないのか、など常に心の中に闇を抱えていた私にとって、人は神

に愛され生かされている、という聖書のメッセージは目からうろこで、洗礼を受ける決心をし、その英国国教会で、幼児洗礼の赤ちゃんと一緒に滴礼を受けました。イエスさまと一緒に新しい人生を歩む喜びでいっぱいでした。

確かなのは神のみ

帰国後、家から比較的近い横浜戸塚バプテスト教会に導かれ、信仰告白をし、浸礼を受けて転入会しました。聖書という人生の道しるべをいただき、教会生活を送るようになったおかげで、学生生活、その後の会社生活も充実していました。その中で、イエスさまが好き、教会が好き、という思いが強くなり、バプテストの教派神学校である西南学院大学神学部に行くことになりました。ただ、その頃の私は、神さまと心中する、というような勢いがあり、聖書の読み方も極端で、家にあった他宗教のお札を黙って処分してしまうなど、家族から反発され、神学部に行く時にも反対されました。大事にいただいた会社を、勉強したいことがあるからと円満退社し、世捨て人になるような勢いで神学部編入学しました。

しかし、神学部で教えられたのは、対話をする事、自己絶対化をしないことでした。神学を学び自分の信仰が相対化される中、何を自分は信じているのかわからなくなり、暗いトンネルに入りこんだようでした。出身教会の牧師には、「信仰が神学によって冷や水を浴びせられ、それでも最後に残るかすかな灯火が大切」と言われていましたが、その灯火さえ消えてしまったように感じました。そして最後に残ったのは自分の信仰ではなく、「…あなたのために、信仰が無くならないように祈った」(ルカ 22・32)、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23・34)というイエスさまの祈りでした。からし種一粒ほどの信仰も私にはなく、それをイエスさまはとっくにご存じの上で導いてくださっていたのです。神学部では、夜遅くまで寮の友人たちと語り合い、たくさん発見を与えられました。横浜の実家に帰省した際には、私の身勝手な行動を家族に謝り、和解することができました。

自分で聖書を読み、対話をしながら

バプテストはひとつの教条で一人ひとりの信仰を縛るのではなく、各々の主体性を尊重します。対話を通し、その人なりの試行錯誤を通し、少しずつ信仰を深めていく過程を大切に教会だと思います。八王子の教会でも、聖書の分かち合いを通し新しい発見に導かれ、楽しんでいます。人の思いをはるかに越える神さまの愛へと出会わせてもらった今、「バ

プテストの信徒でよかった！」と思っています。

左右田淑子

バプテストの信徒でよかった！

a 信仰生活の中での迷いの体験があれば分かち合いましょう。

b 聖書の分かち合いを通しての新しい発見にはどのようなものがありますか？

「バプテストの信徒を生きる」

第 30 回

信徒と牧師—私たちも献身者—

新聞や雑誌にクリスチャンが取りあげられる時、善きにつけ悪しきにつけ必ずと言ってよいほど “敬(けい)虔(けん)な” という形容詞が付されますが、これは一般の方々がクリスチャンの与える印象なり、示す言動から、いつの間にか定着させてしてしまったクリスチャン像ではないでしょうか。

牧師も信徒のひとり

そんなことを考えながら、私が入信したころの牧師像を振り返ってみると、牧師という言葉からイメージして、立派で高潔、かつ温和な人物として思い描き、また献身者と呼ばれることから、私たちとは違う次元の偉い方として勝手に考え、同時に過大な期待をしていましたが、教会生活を歩んでいくうちに、自分の考えと現実とに、次第にギャップを覚えていくようになりました。

そして、ある時、信仰の先輩からバプテストの牧師は信徒の一人であり、牧師は身分でなく職分であり、また教会の招聘を受けて牧師となることを教えられて、私の牧師像は、大きく変わり、自分との関係がより親密に思え、心嬉しくなったことを覚えています。

信徒と牧師の関係が階層的なものでなく、教会が主から託されるいろいろの業に伴う職分を、牧師は召命を受け、献身する中で、教会から信頼をもって委託される職分を担い、一

方信徒はその他の職分を共に担ってゆく、そこでは、信徒はお客さまではなく、牧師と共に教会の主体となることを教えられました。もちろん信徒が主体となることは、決して牧師が軽んじられることではなく、むしろその職分がより明確となり、より牧師の重要性が再確認されると同時に、信徒の立ち方が問われました。

信徒の召命と献身

牧師への召命と献身があるのであれば、信徒としてあり続ける中での召命と献身があるのではないかと私は考えています。

私たち信徒は、イエス・キリストを主と信じ、その言葉と行いに従って生きることを告白したことそのものが献身ではないでしょうか。私の教会で、日本バプテスト連盟の事務所職員、教会付属の幼稚園園長への召命と献身を告白されて歩んだ方、歩んでいる方がいます。

また、教会内に限らず日常生活の中で、自らの家庭で、職場で主に仕える召命と献身はないでしょうか。これも実例ですが、教会と社会とを割り切ってしまう二元論に陥らず、神さまのみ旨を自らの職場でいかに生かすかを心がけ、実践しながら歩んだ方を知っています。

牧師と協働する

教会から散らされて日々を生きる信徒一人ひとりが、共に教会を建てあげる主体として働くときに、そこにきっと牧師との良い緊張関係が生まれ、お互いに励まし、励まされ、支え、支えられる関係が生まれると信じています。さらに、この信徒と牧師の関係で重要なのは、今まで歩んできた教会生活の経験から、「コミュニケーション」だと強く思っています。これは、よく牧師の側に求められたりしますが、しかし一方だけに求められるものでなく、また、言うは易く、行うには忍耐を必要とすることを経験しています。

私たちは、いつもイエス・キリストの体なる教会であり、またその一人ひとりは肢体であることを銘記することを求められているのではないのでしょうか（I コリ 12 章参照）。

渡邊 亙(まこと)

信徒と牧師

— 私たちも献身者 —

a バプテスト教会の具体的な個々の業は、誰から委託されて行われるのでしょうか？

b バプテスト教会には、身分があるのでしょうか？

「バプテストの信徒を生きる」

第 31 回

信徒と牧師 — 冷静な視点と暖かい目線で —

たとえば週報を作る

たとえば週報を作るという働きは誰が担うのか。私たちはよその教会の内側のことをほとんど知らないで、自分たちの教会のやり方をどこの教会もやっているように思っています。そしてよその教会が自分たちとは別のやり方をしているのを見てびっくりしたり感心したり、首を傾げたり。真似てみようと思うこともあれば、助言してあげたくなったりすることもあるかもしれません。

神戸伊川教会では、週報は牧師と「週報作りを担います！」と意思表示した信徒（たち）とが交代で作ります。週報には礼拝式のプログラムのほかに、教会員が全員で共有すべき連絡事項、消息、教会内外の報告や予定、祈りの課題…といった情報と、新来者を意識しての、主の祈りや集会案内、献金の意味やバプテスト連盟の紹介文、キリスト教に関するコラムなどが掲載されます。伊川教会の週報は「教会の名刺」としての役割を併せ持っていますが、週報にもっと積極的な伝道の糸口として、あるいは牧会ツールとしての要素を持たせる教会もあるでしょうし、逆に式次第だけという週報もあるかもしれません。また作成も、牧師が、信徒が、また分担の仕方は…、全部の教会にその教会が決めた週報の意味づけと作成方法があるのでしょう。

牧師の仕事？ 信徒の働き？

週報に限らず教会の働きの全てについて、これは信徒の仕事という決まりや、これは牧師

にしか出来ない働き、というような普遍的な職務分担規程の類をバプテスト教会は持ちません。信徒と牧師が一緒に主に向かって教会を建て上げていく過程で、お互いを冷静な視線と暖かい目線をもって配慮しあいながら、その教会ならではの職務分担の線引きをしていくのだと思います。

この春、関西地方教会連合では3つの教会で牧師就任式が行われました。「〇〇牧師に、教会の宣教、礼典、牧会を委託します…」の招聘の辞を聞きながらぼんやり考えていました。

…着任した牧師は、具体的などんな働きを委託されたと考えているのだろう、教会員一人ひとは具体的などんな働きを牧師に委託したと考えているのだろう。その上で自分たちは何を担おうと考えているのだろう。礼拝説教や、礼典式典の執行などはことさら確認し合わなくても牧師の職務だと考えるのが一般的。それならあれは牧師の仕事？ これは信徒の働き？ 伝道活動、牧会、教会堂の管理、教会活動の維持などなど、細々とした「教会の働き」が次々と浮かんできてこの一つひとつについて分担をいちいち決めるのかなあ…。いつの間にか思いは自分の教会に飛んでいました。

教会が無牧師になることを想定してみると牧師が担っている働きが見えてきます。信徒が担うべき働きはどれか、交替できる作業はないか、会堂の管理など牧師や牧師家族に依存し過ぎていないか…、など信徒としての責任の再自覚が出来、牧師の働きに対する客観的評価も可能になるように思われます。

1 に対話、2 に委託、3 に信頼

牧師と信徒が向き合い職務を分担し合うことの必要性を述べてきましたが、その根底になくてならないのは信頼関係。そして信頼関係を築くための豊かなコミュニケーションが絶対に不可欠であることは言うまでもありません。私たちの中心に、仲保者であるイエスさまが居てくださることも。

鮫島 泰子

信徒と牧師

—冷静な視点と暖かい目線で—

a 教会のさまざまな働きについて、分担を確認し合う機会を教会全体で持っていますか？

b 賜物の発掘について、考えたり、話し合ったりしたことがありますか？

「バプテストの信徒を生きる」

第 32 回

ピンチはチャンス ―牧師招聘―

無牧師の状況を経験して

連盟の 33 の教会・伝道所が 2011 年現在、無牧師です。私自身、これまで 3 度ほど無牧師の中で教会生活を過ごしたことがありました。無牧師という状況は、信徒にとっても教会にとっても、大変厳しい時にあるといつて良いでしょう。しかしこの状況は教会形成の大きなチャンスともいえます。

市川八幡教会は 4 年程前に無牧師を経験しました。まず、主日礼拝の宣教、主の晩餐式の執行、葬儀・結婚式の司式をどうするか、が緊急な課題となりました。宣教、主の晩餐式は、総会で託された信徒が担いました。従来、第 5 週の主日礼拝は信徒宣教日とし、祈禱会も各会で月に 1 度奨励を担当してきたので、大きな混乱もなく守り続けることが出来ました。しかし宣教を全て信徒で担うことも厳しく、足りないところに連盟・近隣教会の協力をいただいたことは本当に感謝でした。

牧師招聘委員会を立ち上げ、「委員会協議内容は信徒常会、牧師招聘活動 PR 誌（教会内）において、委員会の責任で広報するので、委員が個人的に情報開示することは慎む。特に具体的な人事は最終確定まで厳秘」を最初の確認事項として招聘活動を開始しました。具体的な人選に入る前に、私たちの教会は何を大切にしていくのか、また共に宣教の業を担っていただける牧師に何を委託していくのか、を教会員と共に話し合いました。

そうした中で委員会は、①教会組織 40 周年に際する決意表明（教会の罪告白と悔い改め、主の赦しと導きへの感謝、主の愛に対する応答）、②教会の方向性を示した標語「隔ての壁を除く群れへ」、③主の晩餐式文（主の晩餐式のあり方を牧師・執事会・教会員で 3 年近くの間議論を経て式文を作成）、この 3 点を私たちの教会のミッション・ステートメント（教会の使命と働き）として招聘する牧師に紹介し、私たちの教会の姿を理解していただこうといたしました。また、信徒常会や信徒研修会で前記①、②、③の成立経緯・趣旨を共に再度確認し、招聘する牧師に基本的に次の 7 点を委託することを決定しました。①主日礼拝

の宣教、祈祷会の奨励、②主の晩餐式の執行、③葬儀・結婚式等の執行、④牧会の協働、⑤週報の最終確認、⑥渉外関係、⑦牧師館の管理。

牧師任せの教会形成でなく

こうした作業を、教会員と協議しながら進めることは実に時間のかかる大変な作業です。しかしこの作業の中でも教会形成がなされて来たことを強く感じます。それは牧師任せの教会形成でなく、牧師と協働する教会形成の下地が信徒の中に少しずつ出来てきたことであり、一人ひとりが「キリストの体」(I コリ 12・27)の部分であることが、無牧師という厳しい状況の中で、互いにそのみ言葉が肉となったように思います。そして教会の大きな変化は、以前より多くの教会員と祈りを合わすことができたことです。招聘作業のいろいろな場面で行き詰まり、解決の出口が見えない時も、祈祷会での祈りの支えがあつて委員会も奉仕者も励まされてきたのでしょう。無牧師の時、牧師招聘作業の中で、私たちの教会は多くの教会・連盟にも支えられていることを強く実感し、各個教会の連帯の大切さを知らされました。

無牧師という教会のピンチは、実は自らの教会をもう 1 度見つめ、信徒による教会形成が進められるチャンスです。これこそバプテストだからできる作業ではないでしょうか。

眞嶋 豊

ピンチはチャンス

—牧師招聘—

a もし無牧師になったらあなたの教会の業、奉仕で何を担いますか？ それは今、担うことはできませんか？

b 建てられた地において、あなたの教会の使命と働きを具体的に語り合ってみましょう。

「バプテストの信徒を生きる」

第 33 回

信徒と牧師 —お手伝いの方々？—

教会の主はイエスさま

「お手伝いの方々、みなさんでどうぞ」。教会の子どもクリスマス会にママ友を誘ったとき、おみやげのお菓子を手渡してくれながら彼女が添えてくれた言葉です。お手伝いの方々？どなたのことかな？一瞬、私は意味が理解できませんでした。

どうやら友人がお手伝いの方々と言っていたのは、奉仕していた教会員の方々のことでした。我が家は夫が牧師で教会の 2 階に住んでいるのですが、牧師は経営者で、私は経営者の妻のような立場にあると、友人は考えていたようです。

実際には、教会の主はイエスさまで、一人ひとりがイエスさまの身体なる教会の手・足・大事な器官の一つひとつであり、牧師もその器官のひとつです。しかし、イメージとしては、聖職者とそのお手伝いの方々、もしくは、経営者とお客さまという構図に陥りやすいのでしょうか。イエスさまが主ということでは、牧師も含め信徒はすべてイエスさまのお手伝いとも言えるはずなのですが。特に、バプテスト教会は、400 年前に誕生したときから「信徒の教会」としての意識を強く持ち、教会を形成する一人ひとりが証し人、宣教者としての召しを受け、責務を自覚していた群れです。

誰に何を委託する？

私も牧師館に住むようになってから 10 数年たち、いろいろと反省するところがあります。

自分は教会堂の一番近くに住んでいるので、できることはしなければと必要以上に責任を感じ、他の方々の奉仕を奪っていた面もあったと思います。無理をしてでもあらゆる集会に出席せねばとがんばっていたこともあります。しかし、教会での交わりを通し、教会の主はイエスさまであること、だれか特定の人たちのがんばりによってのみ教会が前進していくものではないことを体験させられてきました。

牧師、執事、～主事、～長、あるいは役職ではありませんが牧師の配偶者などはこれくらいのことはするもの、と無意識にあれこれ抱え込もうとしているなら、いったんそれを脇におく必要があるのではないのでしょうか。み言葉と祈りを皆で分かちあいながら、誰に何を委託するのか、何を委託されるのか、を一緒に考え協力し合える、そこにバプテスト教会の豊かさがあるのでしょうか。

誰もがイエスさまの弟子として

例えば、私たちの教会では鉢植えの花などは総務委員会を中心に手入れをしてくださっていますが、以前一時的に私が植えていた時には冬に枯れてしまっていた花が、今ではきれいに咲くようになりました。苗の選び方からして違うのでしょうか。ガーデニングの好きな方、お料理の好きな方、日曜大工の好きな方、人の話を聞くのが好きな方、子どもが好きな方、教会の神の家族にはいろいろな方がおられます。

頭なるイエスさまの みもとで、年齢も性別も違う皆がわいわいと過ごす教会、楽しいな、うれしいな、と思います。牧師のお手伝いの方々、ではなく、誰もがイエスさまの弟子として、主体的に前進していけたらいいなと思います。

左右田 淑子

信徒と牧師

—お手伝いの方々？—

a あなたの教会では、牧師にまたは役員、各奉仕者に何かを委託していますか？

b 健康状態や家庭環境の変化により、各人の奉仕に制限が生じることがあります。

その際の協力体制の工夫はありますか？

「バプテストの信徒を生きる」

第34回

仕事と教会

唯一の主に仕える

毎週の主日礼拝の場から、教会学校の共同学習で繰り返し学んできた「生の全領域で主を証しする生活」の場へと遣わされる私たち信徒。そこは世の価値観が支配するかに見える世俗の世界。この世はそんな甘くはないと割り切って、この世とイエス・キリストの父な

る神さまの2人の主に仕えて生きることは許されるのでしょうか。

この世との闘い

私は23歳で石油会社に入社して以来37年間サラリーマン生活を過ごしました（途中労働組合の専従期間2年を含めて）。入社時に社員に就業規則が渡されますが、そこには社員の守るべき行動が事細かく記され、社内における宗教活動の禁止も含まれています（しかし、おかしなことには、毎月1回会社幹部が社内にある所縁の神社で安全祈願をするのです！）。

そのような環境の中で、私は社員の中にいるクリスチャンと出会い、昼休みの時間に空いている会議室で聖書研究会を開いたり、ある時は、会社の保養施設を利用して修養会も行い、また、労働組合の文化活動として認めてもらいクリスマス会を催したりしたこともあり、その中から、何人かのクリスチャンが与えられもしました。

私自身も社内ではクリスチャンであることを、どの職場に行っても表明し、仕事をする上での判断も、み旨の成ることを祈り努めました。が、営利組織である会社の枠の中では必ずしもその通りにならず、逆にバブル経済時代の最中、企業戦士を気取り、また、自らの社内の地位が向上して傲慢になり、この世の価値観の誘惑に負けた時期のあったことも告白しなければなりません。

共に歩まれる主

派遣される信徒は、「あらゆるキリスト教的なものと、あらゆるキリスト教的でないものとの交差点に立っています」（シモーン・ヴェイユ）。わたしたち信徒が一サラリーマンに限らず誰もがこの混雑する十字路で日常の生活を通して、神さまが愛されるこの世に仕えるよう立たされ、教会を代表して歩もうとする時、イエスさまが弟子たちを派遣する際に言われた、次の言葉を思い出すのではないのでしょうか。「自分の十字架を背負ってついてくる者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」（ルカ14・27）。

厳しい状況におかれて挫折し、あるいは誘惑に陥る時、闇が光を避けるように礼拝の場に出ることが、本当に苦痛に思える時期がありました。しかし身を引かずして主日礼拝に出席した時、ある宣教師から、「君の顔はいつもの君の顔ではありません、どうしましたか？」と温かく礼拝に迎えられ、宣教の言葉に裁かれ、支えられ、主の晩餐式でイエスさまの十字架と復活の意味を重く、深く受け止めたことを忘れることができません。

信徒の特権を喜ぶ

信徒一人ひとりを派遣する教会は、信徒が「教会的」関心だけで礼拝、諸集会に出席することを良しとするのではなく、信徒の普段の生活での奉仕の業を、教会の出来事として覚えて、支え、励まし、祝福を祈る責任があります。そして、その中心は何といたっても主日礼拝であると思います。私たちは、礼拝から礼拝へと向かう生活の中で、自分に与えられている「仕事」をしっかりと位置づけ、その限界を知る一方で、この「仕事」を通してこの世に仕えることは信徒の特権であると喜んでいきたいと思っています。

渡邊 亶(まこと)

仕事と教会

a 「教会的」な仕事だけが奉仕なのでしょうか？

b 日常生活における「仕事」を、この世に仕える信徒の特権として、いつも喜んで行えるのでしょうか。

「バプテストの信徒を生きる」

第 35 回

朝バプテスマ ―家庭と教会―

特別な時間「朝バプテスマ」

『朝早く、見よ、太陽はのぼる。わが救い主キリストは甦り給う。罪の夜は追い払われ、光と救いと生命とが、再びもたらされた。ハレルヤ！』ボンヘッフアーは、宗教改革の教会が歌ったこの復活のキリスト賛歌を挙げて、「朝早い時間は、復活のキリストの教会のものである」と言っています（著書『共に生きる生活』）。

朝未だき、生活の匂いに染まる前の澄んだ空気の中で、その肢体のひとつであることを意識しながらキリストの教会の時間にどっぷりと浸る…。起きぬけの空虚な心にみ言葉が染み透る…。バプテスマの冷たい水から引き上げられた瞬間の、あの清々しさと感動が甦っ

てくるこの特別な時間を何と表現したらよいのでしょうか。「朝バプテスマ」。朝のデボーションはまことに信仰者にとって霊の朝ごはんであり、1日の信仰のエネルギーです。

私を保ち続けるために

キリスト者である私の日常の働きは、教会に関連することを除いて、家事、家族のケア、家庭管理、居住する地域社会への奉仕…、いわゆる「専業主婦」です（ここでは多様性を重んじて、括弧つきで「専業主婦」と表記します）。家庭内で働いても、仕事をする、とは言わず、家政を職業の一種として分類しにくい今の時代にあって、私のような「専業主婦」の立ち位置に居る大勢の人たちはどういう呼称で呼ばれるのが本当にふさわしいのか、考えてしまいますが…。

さて、その在りように関わらず、すべてのキリスト者にとって「朝バプテスマ」は大事ですが、とりわけ「専業主婦」が家政のプロフェッショナルとして自認し立ち続けるためには、人一倍この特別な時が必要だと私は感じています。社会に出て職業を持つということは、生計を立てるという実利的な目的と、社会貢献という間接的な目的をもって自分の能力や時間などを提供し、その代償として目に見える形での報酬や評価を受ける、おおむねこう定義できると思います。働きの目的や成果や手応えが実感できる社会人に対して、「専業主婦」には働きのモチベーションを保ち続けるための自分なりの工夫が必要だと思われます。なぜなら、働きの目的に、家族への愛、社会や隣人への配慮、といった多分に主観的、心情的な動機が含まれているからです。また、受け取る果実が、感謝とか喜びとか感動とか、とても素晴らしいものでありながら、目に見えず形が捉えにくいものだからです。自分の働きを自分自身で管理する難しさがありますし、時に孤軍奮闘の悲哀を感じることもあります。

良い働きをするために

弱い私がこのフィールドに遣わされて、神さまからも人からも期待される良い仕事をするためには、イエスさまのまなざしはなくてはならないものです。人にしてもらいたいと思うことを人にしていくためにはまず、すべての人のためにご自身を献げ尽くされたイエスさまのお姿を心にしっかりと映す必要があります。「専業主婦」としての召しに与った私（たち）にとって「朝バプテスマ」が人一倍必要な理由がここにあります。

恵みと喜びの日

働きの性質上、「朝バプテスマ」を犠牲にしなければならない時があります。家族の都合を自分の予定に優先させるからです。また、時には自分の体や心の疲れから「朝バプテスマ」の時間を睡眠に振り替えてしまう日もあります。小さな、大きな信仰の闘いがある中で「朝バプテスマ」から始めることができた日は、一段と恵みと喜びにあふれた 1 日になります。

鮫島泰子

朝バプテスマ

—家庭と教会—

a デボーシヨンの時を確保する知恵を分かち合ってみましょう。

b デボーシヨンの恵みと喜びを分かち合ってみましょう。

「バプテストの信徒を生きる」

第 36 回

主日は週日を結ぶ線

二元論からの解放

クリスチャンホームで生まれた私にとって、日曜日は家族で教会（礼拝）に行く日でした。しかし思春期となり、主日と週日のギャップの中で生きていた自分自身に自己嫌悪を抱くようになり教会を離れていきました。まさに二元論の中に生きていたのです。しかし 7 年後教会に戻され、少しずつそうした考えは変えられてきました。

主の日（日曜日）は、私たちにとって祝日です。祝いの日、喜びの日です。このことを 10 数年前に、ホームレス状態から自立して礼拝に出席していた方（A さん）の言葉で教えられました。

当時私は会社の統合合併準備という多忙な業務を続けており、週休 2 日という恵まれた環境でしたが、土曜日にも出勤せざるを得ない状況でした。しかし今思えば、主の日は仕事を離れ、礼拝に出席できたことは本当に主の恵みの中にあっただのと感謝です。

そのような状況の中で礼拝出席していた私に、その方は「眞嶋さん、日曜日に教会の方々と一緒に礼拝し、賛美できるのは本当に幸せですね。私は日曜日が待ち遠しく、嬉しくて本当に感謝です」とおっしゃいました。当時は業務の疲れを覚え、ある時は惰性で礼拝に出席していた私に、彼の言葉は、「そうだ今、私は主によって礼拝に招かれていたのだ。わたしは主を礼拝するために造られ、共に主を賛美するために生かされているのだ」と強く思い知らされました。

市川八幡教会では、祈祷会は水曜日の午前 10 時と午後 7 時 30 分から持たれていますが、現役のころは年に数回出席するのがやっとでした。20 年以上前から、私が在職していた保険業界では過密労働解消と経費削減（残業代の削減、むしろこちらの方が主目的）から月 2 回の水曜日は、「早帰り日」と称して午後 8 時には退社する運動が始まりました。私の職場は保険金支払部門でしたので、普段から被災者に 1 日でも早く支払うことを推進していた決裁者として、支払い準備をしている部下を残し先に帰ることは、私にとってはできませんでした。早帰りと言っても午後 8 時ですから、もちろん夜の祈祷会には間に合いません。しかし祝日の水曜日は午前 10 時からの祈祷会に、普段出席できない方々と共に祈りを合わせ、み言葉を分かち合えたことは感謝でした。

神と会った私たち

主の日の礼拝に関し、私の心に刻まれたもうひとつの大きな言葉があります。それは、昨年度の全国礼拝音楽研修会の基調講演での濱野宣教研究所長の語られた、「神と会うために礼拝する」というより「神と会ったので、礼拝する」との言葉です。私にとって主日は、週日を結ぶ糸のようなものです。主日は日々の業から離れ休息・恵みの時です。主を礼拝しまた新しい業に遣わされ、生活の場で主の僕として誠実に生き、隣人との関わりの中で自分の弱さ、醜さ、傲慢さを知らされ、それでもなお赦しの中にいることを知り、その生きざまを通して礼拝する。そしてまた主日の共同体の礼拝へ喜びと感謝をもって集められる。まさに A さんが「神に会ったので、喜びを持って礼拝する」との思いと同じではないでしょうか。

「…自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたがのなすべき礼拝です」（ロマ 12・1）。

眞嶋 豊

主日は週日を結ぶ線

a 主日礼拝を守るために、何を大切にしていますか？

b 共に礼拝を捧げるとは、どういうことでしょうか？

執筆者紹介（2012 年 10 月現在）

■「バプテスト 400 年」（『バプテスト』誌 2009 年度連載）

加藤 誠（かとう まこと）

日本バプテスト連盟常務理事／泉バプテスト教会協力牧師

1961 年生まれ。1969 年、札幌バプテスト教会にて受浸。

■「今、バプテストの教会を建てる」（『バプテスト』誌 2010 年度連載）

鈴木牧人（すずき まきと）

郡山コスモス通りキリスト教会牧師

1973 年生まれ。1984 年、志村バプテスト教会にて受浸。

田坂 元彦（たさか もとひこ）

横浜ニューライフバプテスト教会牧師

1972 年生まれ。1983 年、大井バプテスト教会にて受浸。

柴田良行（しばた よしゆき）

浦和キリスト教会牧師

1968 年生まれ。1991 年、単立教会で受浸、99 年に直方バプテストキリスト教会に転入。

■「バプテストの信徒を生きる」(『バプテスト』誌 2011 年度連載)

濱野 道雄 (はまの みちお)

日本バプテスト連盟宣教研究所所長／花小金井キリスト教会協力牧師

1965 年生まれ。1975 年、広島キリスト教会にて受浸。

渡邊 亶 (わたなべ まこと)

恵泉バプテスト教会会員

1939 年生まれ。1959 年、恵泉バプテスト教会にて受浸。

鮫島泰子 (さめじま やすこ)

神戸伊川キリスト教会牧師 (2012 年 5 月就任)

1952 年生まれ。1987 年、神戸西バプテスト教会にて受浸。

眞嶋 豊 (まじま ゆたか)

市川八幡キリスト教会会員

1948 年生まれ。1962 年、日本バプテスト東京第一教会にて受浸。

左右田淑子 (そうだ としこ)

八王子めじろ台バプテスト教会会員

1969 年生まれ。1990 年、カナダ Brentwood Anglican Chapel にて受洗、

同年、横浜戸塚バプテスト教会にて受浸。

『バプテスト』誌ブックレット

いま、バプテストを生きる

ーバプテストの教会形成の課題を共に考えるー

2012 年 10 月 1 日発行（500 円）

発行人：加藤 誠

発行：日本バプテスト連盟

〒336-0017 埼玉県さいたま市南区南浦和 1-2-4

Tel.048-883-1091／Fax.048-883-1092

ご注文は総務部販売管理室まで (hanbai-kanri@bapren.jp)

郵便振替口座：00150-9-192579

印刷：ニューライフミニストリーズ（新生宣教団）

レイアウト：JC ユニット

表紙・カットデザイン：滝沢しのぶ

編集・校正：木原康之、かくのぶえ

本書の編集責任は日本バプテスト連盟にあります。複製でのご利用はご遠慮ください。

©日本バプテスト連盟